
のんびり行こうよ？

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
のんびり行こうよ？

【ZPDF】
N1023A

【作者名】
維月十夜

【あらすじ】

靈感少女、神崎ゆすらと、態度がでかくて、我が儘で、でも憎めないヤツなウサギ妖怪・翡翠ひすいとの珍道中！

出逢い（前書き）

ども、維丹です。

今回ま、初めて「メモリ（らじせきもの）」を書いてみました。まだ至らぬ点もあるかも知れませんが、まあ、楽しんで読んでくださいな

出逢い

「くおの…バカ息子が！？これ程言つても、群れを継がぬと言つながらば、仕方ない…」

四方八方に、怒号が轟き、地面をたわませた。

中国、某山中。

の崖の上。

大中、二つの影が、激しく言い争つていた。

「なんだよ親父、許してくれンのかよ？下界行き」

二つのうちの、中くらいの方の影が詰つ。

動く影は、どうやら獸の形をしているようだ。

「許すもなにも…好きにするがいい」

「おっ、ホントかよ親父！」

中くらいの獸が、嬉しげにぴょんぴょんと跳ね回る。

しかし、次の父の言葉に、彼はぴたりと動きを止めるのだった。

「その代わり…」

「な、なんだよ…いいんじゃねえのかよ？」

「その代わり、お前など勘当じや」

「へ？」

「勘当だと詰つてあるひ、ドンドモ、好きな場所へ行くがいい

…？」

蹴りました。

お父さん、息子、落ちていきますよ？

いいんですかね？

「くつそじじい、てめえ、本氣で蹴りやがったなあ！死んだつて、こんな山にや戾んねえよ、安心しなつ」

いや、暴言はいてますよ…

崖を、いや、山から転げ落ちていく息子にまちがつともせず、彼の父は、かけ去つていつた。

お父さん、無視ですか。

ああ、大自然の、なんと厳しいことよ。

もう、どこまで転げ落ちただろう。

やつと、回転が止まつたところで、彼は目を開いた。

「つてえ、あのじじいめ…絶つ対に許さねえ。うーん、でも無傷なのが、唯一の救いだな。てか、ここどこだ？」

彼は、ひょこり、と後ろ足で立つと、空氣の匂いを嗅いだ。長い耳は、敏感に音を聞き分ける。

「人里まで、下りてきちまつたみてえだな、どうするか」しばらく迷つた末に、彼は歩き始めた。

転落のせいでの、もう力の限界が近いのだ。
どこか、緑のある場所で、休まなければ。

彼は、ふるふる、と身震いして、小さく唸つた。

氣を、飛ばす。

氣を飛ばして、場所を探しているのだ。
家を一軒、二軒通り越し、市場を抜けて。

街外れの、湖畔にあるリゾートホテル…

見つけた！

彼は、走り出す。

ぴょん、ぴょんと、屋根をいくつも飛び越えて、大きな鬼が、空をかけていった。

「ちよつと、ゆすりつてば…待つてよう、どこ行くのよ」

深闇の広がる、森の中を行く影が一つ。

ちなみに、一つの間隔は少ししか、離れていない。

前を行く、ゆすら、と呼ばれた少女が、気遣わしげに振り向いた。

彼女の、背中を被つ、赤みを帯びた茶色の髪が、夜風にそつと揺れる。

「どひつて、散歩じゃない…ホテルからも近いし、いい場所」

「こんなに暗くて、気味悪いのに？あなたのことだから、オバケ見たって、怖くないかも知れないけどさ、あたしは、フツーの人なんだからねっ」

「もう、相変わらずね、綾子は。なんもいない…よ？」

そう言いかけて、ゆすらは動きを止めた。

「なっ、なによゆすら…やつぱり、いるの？コレ」

気弱な、彼女の友人・綾子は、両手を前で下げ、オバケのポーズをしてみせる。

「ううん、兎がいる」

そう言うと、彼女は、ぱつと顔を明るくさせた。

彼女は、かなりの動物好きなのだつた。

「えっ！…どこどこ、野生動物よねっ？」

「う、うん…ほら、あそこに」

ゆすらは、今いるここから、大して遠くない場所にある、木の根本を指さす。

根本には、大型犬くらいの大きさをした、獣が寝そべっていた。

「もーっ、どこにもいないじゃな…ってまさか、あんたまた？」

綾子は、残念半分、呆れ半分のため息をついた。

「らしい、ね」

そうなのだ。

あたしは、ほかに見えないモノが、見える人なのだ。

そのせいで、気苦労がたえなかつた。

友人はいるけれど、それ程仲がいいというわけでもない。

だが、今、一緒に旅行してくれている彼女は、幼稚園からの幼馴染みで、あたしの、よき理解者である。

ゆすらは、ちらり、と獣の方を見た。

月の光を弾いて、つやつやと輝く毛皮は柔らかそうで、ゆすらは触つてみたい衝動に駆られた。

「ちょっと、行ってくるね？そこで、待つてくれる？」

「い、いいけど…平気？」

「うん」

ゆすらは、寝そべつたまま動かない獸に、やつと近づいた。

「なんだ、お前…俺が見えンのか?」

耳だけをゆすらの方に向けて、獸が話しかける。

決して、機嫌がよいとは言えない声に、ゆすらは、おや、と瞠目した。

声は、意外に若い男の声だつたからだ。

「話せるんだ、妖怪さん」

「まあな…で、お前は?」

寝そべつた大きな兎は、けだるそつに、ゆすらに顔を向けた。

「え、あたし?人間、だけど」

「そんなの、見りや分かる、名前だよ、名前つ」

「あたしは、ゆすら。神崎ゆすら」

「ふーん、ゆすらね…俺が見えるなんて奴も、いるんだな」
興味なさげに言つて、彼は毛繕いを始めた。
つていうか、かなり無遠慮な奴だ。

毛が飛び散つてゐる。

そんな中で、ゆすらは、兎がしきりに鼻を氣にしてゐるのに氣がついた。

「あんた、ケガしてるのね?どれ、ちょっと見せて?」

兎は、頭を撫でられて、慌てて後ずさつた。

「やつ、やめる…余計なことすンじゃねえ!ほつとけば治る」
「ひつ、と顔をそむけた彼に、ゆすらは、くすくすと笑つた。

「なつ、何が可笑しいつ」

「カワいいな…て、でも、このくらにはさせてちょうだい」

ゆすらは、ムキになる彼の鼻面を、そつと撫でてやつた。

「ん、なんだよ…これ」

彼はしきりに、絆創膏を爪でつつきながら聞いた。

「絆創膏よ、鼻の頭、すり剥けてたからね。治るまで、取っちゃダメ

メよ?」

毒氣を抜かれた彼は、きょとん、とゆすらを見つめた。
月の光に、彼の毛皮は銀色に輝き、淡い緑青の瞳は、宝石を思わせる。

しばらく、両者の間に静寂が流れた。

しかしそれは、すぐに彼の腹の音で破られた。

「なあ、なんか食いもん、持つてねえか?力が足りねえんだ」

「持つてるけど、兎…こんなもの食べるかなあ」

ゆすらは、『ハセゴとポーチをあさると、アルミホイル包みの、握り飯を出して見せた。

すると、彼は巨体を起こして、ゆすらの太股に両前足を乗せた。
ピコピコ、と鼻を動かす様は可愛いが、これが、普通の大きさなら、もつとカワイイのになあ、と、そんなことを、内心で少し考えた。

「ふんふん、なんか、美味そうな匂い」

彼が、受け取つた握り飯を、包みのまま食べ始めたので、ゆすらは慌てて包みを剥がす。

「ん?なんか、問題あるのか?」

「あるわよつ、大あり!お腹壊したらどうするのよ?」

ゆすらは、アルミホイルを取り上げて怒鳴つた。

「怒鳴るなよ、耳痛えなあ。あのな、俺たち黄兎（こうと）つていうのは鉱物を食つて生きてんだ、ちなみに、その薄っぺらいヤツも金属だぜ」
伸びあがつて、ゆすらからアルミホイルを取り返すと、山羊が紙を食べるようになつて、あつといつ間に平らげてしまった。

「お、美味しかつた?」

舌なめずりしている兎に、おそるおそる、ゆすらは聞いてみる。

「まあまあ、かな?」

(まあまあって、あんた…人からもの貰つておいて)
がつくりと、肩を落とすゆすら。

「とりあえず、元氣でたのよね?あたし、もつ行かなきや…人を待たせてるのよ」

背中を向けたゆすらに、彼は名残惜しげに話しかけてきた。

「また、ここに来るのか？」

「え？ うん……こっちこいのうちなら、来れると思つけど」

「そつか、待つてるぜ。また、なんか持つてきてくれよな

」

彼は、嬉しそうに尻尾を振つた。

「う、うん」

これって、結局パシリじゃないですかね？

（な、懐かれた……妖怪に）

さよならから…（前書き）

口の悪い、でも可愛いウサギ妖怪・翡翠に逢い続けるゆすら。 < b
>しかし、二人に別れの時が来た。 < b >

わからなかり…

次の夜も、ゆすらは一人、ホテルを抜け出して森に来ていた。

「え と、あ…いたいた、ウサちゃん」

ゆすらは、木の根本に座る彼を見つけると、頭を撫でた。

「おひ、ゆすら…ふああ、なんか、持つてくれたか？」

昨夜に比べて、かなり縮んだ彼を抱き上げて、ゆすらは尋ねた。

「なんか、サイズダウンしたね、どうしたの？ウサちゃん」

「うひ、ウサちゃん言つなつ、ちゃんと名がある…」

彼は、ゆすらの腕から脱出すると、足を鳴らした。

「名前…そう言えば…知らなかつたわね」

「つたく、オレの名は翡翠だ、ヒ・ス・イ、もつウサちゃん言つん
じゃねえつ」

翡翠は、後ろ足で頭を搔きながら、めんじくせもつて言つた。

「今のサイズのままなら、可愛いのにねえ」

「はー…それだが、今日は月が出てないだろ？、いつも夜は、妖
力が半減しちまうんだよ」

「ふうん、月華げつかを吸つてるんだね」

月華とは、月の光のことだ。

月はすべてに、なにかしら強い影響を与えると言われている。

「ああ。なあ、ゆすら…お前は、旅行者なんだろ？」

「ええ」

「いつまで、ここに来れるんだ？どこから来たんだ？」

小兎の、緑青の瞳が、不安げに揺れた。

「たぶん、今日が最後、明日の朝の便で、日本に帰るわ

「それまで、ここにいるんだよな？」

翡翠は、寂しそうに、ペシャリと両耳を下げた。

「うん」

「ここモン見せてやるわ、つこいこよ」

「え、あのちよつと、翡翠つ？」

翡翠は、走り出す、ゆすらも後を追つた。

森の中を、ひたすら走り、藪を搔き分け、川を渡つて、景色が一望できる高台に登つた。

辺りはまだ暗く、遠くに、街の夜景が星ぐずのよつて、明滅している。

ゆすらは、翡翠を抱きあげる、するとい、翡翠はゆすらに顔を寄せしてきた。

「翡翠？」

「寒いか？ もうすぐ夜明けだ、待つて」

「う、うん」

そうするうちに、いつの間にかネオンが消え、空が白み始めた。

「見てる、明けるぞ」

「うわ…す、い」

朝焼けが、赤く、世界を染めていく…

生まれたての、柔らかな風が、一人を優しく撫でた。

「だろ？俺な、この瞬間が、一番好きなんだ」

「ありがと、翡翠…いい子ね」

ゆすらに撫でられた翡翠は、気持ちよさそうに、手を組めた。

「照れるぜ…」

「お別れだね、翡翠…短かかつたけど、元気でね」

翡翠の茶色い毛皮を、ゆすらの涙がぬらす。

「おいおい、別れつてのは、笑つてするもんだぜ？ 泣くんじゃねー

翡翠は、ペラリ、とゆすらの頬を舐めた。

「そだね、そうだね…」

ゆすらは、涙を拭いて、翡翠を降ろしてやつた。

「行け、もう振りむくなよ？」

「う、うん…」

去つてこく、ゆすらの背中を、翡翠は、こつまでも見送つていたの

だった。

そして、ゆすらの中国旅行は、静かに幕を閉じた。
…よう見えた。

天災は、忘れた頃にやつてくるー（前書き）

中国旅行から、半年後の夏。
ゆすらの元に、差出人不明のダンボールが届いた。
ダンボールの中には…
靈感少女、神崎ゆすらと、我が儘で口が悪いけれど、なぜか憎めないウサギ妖怪・翡翠の珍道中！

天災は、忘れた頃にやつてくる！

炎天下の熱が、アスファルトを灼ぐ。そこかしらで、蝉の集すだきが聞こえる、いまは夏だ。

あの中国旅行から、半年が過ぎていた。
遠くから、かすかにエンジン音が近づいてくる。それは、角からぬつ、と頭を覗かせて、狭い道路をいっぽいに占領して停止する。
ぎり、と鈍い音がして、お屋敷の大門の前に、いるだけで暑苦しい、
トランクが止まった。

　　ピンポ　　ン。ピンポ　　ン-ピンポンピンポ
　　ン-

涼しげな呼び鈴が、せわしなく玄関に響く。

「つるさいなあ…もう、誰よ~」

一階の玄室で、パソコンの画面に向かっていたゆすらは、重い腰を上げた。

無視をすれば、荷物を置いて帰るだらつと思い、そのまま10分ほど放置しておいた。

しかし、なかなか帰るそぶりがなく、現在に至っている。
なぜかしづとい配達員に、根負けしたのだつた。

「は　　い」

ドアを開けると、予想したとおり、配達員の男がダンボールを抱えていた。

「神崎、ゆすらさんですよね？判子か、サインお願ひします」

「あ、はい…」

ゆすらは、サインを書きながら、内心訝しく思つた。

(どこからだらつ、なにも書いてないし。しかも…なに、生もの…
?どうしよう、もつサインしちゃつたしなあ)

「それじゃ、はい。ありがとうございました

内心のほんやきも空しく配達員は、ムダに爽やかな笑顔で、去つていつてしまつた。

「は、はーい」

作り笑顔が、哀しい…

（んもう…どうしてこうなるのよ

（ー）

配達員の男が行つてしまつてから、ゆすらは、自己嫌悪に打ちのめされていた。

「はあ…とりあえず、これ運ばなくちゃ」

一体何なのか。得体の知れないダンボールを抱えて、ゆすらはとぼとぼと玄関に入つていつた。

「ん

ゆすらは、腕組みをして、ダンボールとこらめつ。」

この箱の中身は、一体何が入つているんだろう？

そもそも、このダンボールは、どこからきたんだろう？

いくり考えてみても全く、心当たりがないのだ。

「まつたくもう、贈り主の名前もないし、怪しいわよ絶対…箱開けたら爆弾とかだつたりして。」じつのは、用心が肝心よねつ、うん

ゆすらは、そう言いつながらも丁寧に、ガムテープを剥がしていつた。やはり、気になるのだ。

危機感より、好奇心が勝つてしまつた。

が、しかし、蓋を開ける氣には、なぜかなれなかつた。細かに手が、震える。

ダンボールの前で迷つことしばし、蓋を開けつとした彼女は、聞き覚えのある声を聞いて、ぴたりと動きを止めた。

「オイオイ、早く出せよ…」じー、熱いんだ」

声と共に、うにゅ、うにゅ、とダンボールの持ち手から、茶色い小さな鼻面が覗く。

「えつ、また…か、生ものつて

「おう、俺だ：翡翠だ」

ぱか、と頭でフタを持ち上げて、茶色い兎・翡翠が顔を出した。

କାନ୍ଦିଲାରେ କାନ୍ଦିଲାରେ କାନ୍ଦିଲାରେ କାନ୍ଦିଲାରେ

身震いを一つして、無事、ダンボールから脱出した彼は、ニヤリと

人間のように笑つて言つた。

國語の世界が、どういふことを語るか、

せた。

ぬすりが、まだ青い顔で、おそれおそれ彼に尋ねてみる。

「ふう
ん、やつぱり妖怪ね、ウサちゃん

と流し田でぬめぬめし、
翡翠の毛皮が逆立つ。

「痛くないんですねナビ」その聲には、喜びの輝きはない

「そりゃ、手加減したからだ。お前に逢えたから、嬉しいんだよ」

もしも、どうぞは、なんだか照れているようだ。

「そり、そんなことないわよー?」

そんなこんなで、ウチに、妖怪の居候が増えた……

天災は、忘れた頃にやつてくるー（後書き）

「んばんわ、維舟です。『**のんびり**』『**いつよ**』のお届けです。『**ゆき**』今回はまた、翡翠再びです。『**ゆき**』ゆすらに田を付けた彼はちよつと、運が悪いです。『**ゆき**』ゆすら。彼女、実は『**ゆき**』それでは、どうぞ『**お**』賞味くださいな

陣取り合戦！（前書き）

黄兎＝ウサギ妖怪・翡翠と同居し始めたゆすら。＜b＞我が儘間な翡翠に振り回され、ゆすらは疲れ気味。＜b＞騒動たっぷりの同居生活。さてはて、どうなることやら。＜b＞靈感少女・神崎ゆすらと、口が悪くて我が儘だけど、なぜか憎めない奴なウサギ妖怪・翡翠の珍道中。

陣取り合戦！

ウチには妖怪が一匹、棲みついている。

それは、今あたしのベッドを占領しているコイツ
「もひ、寝苦しいのよ…ちゃんと、アンタ専用の寝床用意してあげたじゃない」

「いやだね、こっちの方が、寝心地がいい。やすらばつかりズルいぞ」

茶色い兎が、コロンコロンとベッドの上を転がりながら言つた。
邪魔で仕方がない。

以前、一度だけベッドに寝せてやつたことがある。
それで味を占めたのか（絶対そうだ…）コイツは図々しくも毎晩ベッドを占領するようになつた。

「はいは い、カゴに戻ろうね？」

ゆすりは、翡翠を抱き上げて、ケージの中に入れてやり、鍵をかけた。

「おい、コリゆすりは、こめーつ…んな場所ちつとも嬉しくねえよ、
出せつてばー！」

「だつて、毛抜けるじゃないの…イ・ヤ・よ、じやあおやすみ」

バシン、と勢いよくドアが閉められる。

「あーくそー、ゆすりの奴めえ…あつう、下心だしたのが、いけなかつたのかあ？」

翡翠は、兎らしからぬ、胡座をかきながらぼやいた。
あぐー。

もひ、言葉を話す時点では、普通ではないのだが。

「しかしだな、あいつは…重大なミスをした…こんな鉄檻、食っち
まえば出られるんだよなあ」

兎の手で、ピースをする翡翠。

そんな悪巧みをしているが、ケージの中が狭いので、思いつきり頭をぶつけてしまつた。

「ぐおつ！？…てえー、狭い場所はキライだ！」

虫食い穴を開け、ケージから脱出した翡翠の前に、また新たな難関が、立ちはだかっていた。

「次は、これだな」

ゆすらの、部屋のドアである。

「つたくアイツは、毛が飛ばなきやーーんだろ？要は、形を変えりどんどん形がなくなりやいって事だ」

翡翠は、身震いを一つすると、水飴のように、形を歪ませた。それから、大きく膨れあがつたかと思うと、そこで、ふいに動きを止めた。のそり、と人影が起き上がる。

「あの姿だから、ナメられたんだな…よし、これで問題解決！アイツばっかし、いい思いさせねえぞ」

茶髪をガシガシ、と搔いて、翡翠はドアノブに手をかけた。居候のクセに、生意氣です。

「そーあてとつ、とつととゆすらの奴を叩つ起つ起つ…ぶへつ…！」ドアを開けた翡翠の顔に、枕が直撃！

「ブツブツと、ひるさいわね…なんのよアンタはつ」

眉間にシワ。

ゆすら、不機嫌モード全開である。

「つてて、ぬあにしやがるつ、バカぬすりー。」

ゆすらは、ふいを喰らつて瞠目した。

「え あの、どちら様？」

いきなり現れた謎の美男に、ゆすらは半歩後じたる。

「見て分からんかつ、翡翠だよつー！」

「え？」

「そうだ」

二人の間に、しばしの静寂が流れ。

「じゃ、そういうことで、おやすみ」

「ぐおら、現実逃避すなー！」

部屋に引っこもったとしたゆすらの髪を、翡翠は慌てて捕まえた。

「痛あい、もう！アンタ、人間にもなれるのね」

「当たり前だつ、あんな狭い場所に閉じこめやがつて…許さねえぞ」

ゆすらに、青筋が浮く。

この兎は、居候のクセに、どこまで我が儘なんだらうか。

「もう、何が不満なのよつ、ちゃんと寝床も用意してあげたのに」

「全部だつ！俺あこれからは、この格好で過ごすことにした！」

「だから、なに？」

「部屋だよ、部屋よこせ」

どうやら、コイツは自分専用の部屋が欲しかつたらし。

両親が亡くなり、使用人も、もういないので部屋は腐るほど余つて
いる。

だから、別にいいのだが。

欲しいなら欲しいと、素直に言えぱいいの。

「いいよ、廊下の脇の和室使つて」

「ホントか！サンキュー」

ぱああ、と一気に顔を明るくする翡翠。
現金なものだ。

「布団は押入れね」

「おう！」

「あ

意氣揚々と跳ねていく翡翠を尻目に、ゆすらは、深へく溜息をついた。

「あ

「これで、やつと眠れる」

しかし、ゆすらがベッドに入った頃には、すっかり夜が明けていましたとさ…

まあ、人生…焦らず急がず。
のんびり行こうよ…

海に行ひやー（前書き）

騒動たつぱり、波瀾万丈の同居生活を始めて、ひとり。r相変わらず、我が儘な翡翠が、今度は…r靈感少女・神崎ゆすらと口が悪く、我が儘。だけど、憎めない奴なウサギ妖怪・翡翠との珍道中！

海に行ひや！

皆さん、聞いてください。

ウチには、すっかり人間化した妖怪が、棲みついています。
まあ…人間化したといつても、やっぱり妖怪なので、なにかと大変
なのです。

「ゆすらー、メシ！」

翡翠は、ゆすらに向かつて茶碗を突きだしていた。

「あんたねえ、これで終わりよー何杯目だと思つてんのつ？」

毎朝、この調子だ。

食べ盛りの子供でもないクセに、コイツはよく食べる。
単なる、大食漢なのか？

「いーじゃねえかよ、美味しいんだから」

「う…分かつたわよ、ほりつ」

「おつ、サンキュー」

もう、何杯目かも分からないゴハンを、嬉しそうに食べる翡翠を見て、ゆすらは溜息をついた。

『美味しい』と言われて気を悪くする奴は、少ないんじゃないかと
あたしは思つ。

しかし、こいつと暮らし始めて、ひとつ
未だ、苦労が絶えない。

例えば。

パソコンの回線は食いちぎるし。

包丁を食べて、驚かせるし。

リモコンは壊つて壊して、もう5台目だし。
以下略ッ！

「なあなあ、ゆすらー…俺、あれ行きたい」

彼の指先は、テレビに向いている。

「海？」

しかも。

「マイツ、妙に世間慣れしているのだ。

「ここから近いだろ？ なあ、行こうぜえ」

ねだる翡翠が子供のようすで、ゆすらは苦笑してしまった。

「ふう…ここへんアコ、仕事もないし。いいわよ」

「やつこ…じゃ、今すぐ行こうぜ」

どこからか、浮き輪を取り出す彼に、ゆすらは面食らった。
いや、ちょっと今からつて…。

もう行く気満々だし。

「用意してくれる？」

「え、あ…うん」

嬉しそうに跳ねていく翡翠に、ゆすらは、本田向回めかの溜息をついた。

（子供みたい…）

とこりとこで、海につきました。

翡翠、なんか、はしゃいで注目をれてるし。

恥ずかしいなあ、もう…

外見も、結構いい方だし、若い娘にモテている。

…けど、気にしてないみたい。

（つて、あたしも一応、若い娘なんだが…）

「ゆすら、ゆすら…あつちで氷売つてんぞ、あれ食いたい」

あつ…マイツ、またつ（怒）

焼きイカを、頬張りながら言つ翡翠を、ゆすらは思いきりどついた。

「もう…よくそんなに食べられるわねつ、しうがなにな…あと
一つだけで終わつよ？」

ゆすらは、「そごそ、と財布から小銭を出して、翡翠に渡してやる。

「ホントかつ、サンキュウなつ」

無邪気に笑つて屋台に走つていく彼に、こつ之間にか、見とれてい

る自分に気づいたゆすらは、慌てて頭を横に振った。

（いけない、いけない…あたしとした事が！）

一瞬、あいつがカツコよく見えた。

うつん、ダメ。

あいつは妖怪。

カツコよくても妖怪。

炎天下のせいで、のぼせてしまったらしい。

なんだが、クラクラするので、日陰に移動…畠んで休む事にした。
(はあ…あたし、なーにやつてんだろ)

「さやっ

溜息をつきかけたその時、頬に冷たい物を宛てがわれて、ゆすらは飛び起きた。

「ほれ、冷たいもん。お前、暑いんだろ？」

顔をあげると、そこには逆光を浴びた翡翠。

「あ、ありがと…でも、これどうしたの？」

(どつから沸いて出たんじや、コイツは)

一応、にこやかに礼を言つが、ゆすらは内心毒づく。

渡されたのは、ミネラルウォーターだった。

「屋台のおっちゃんがな、オマケしてくれたんだ。お前に持つてやれって」

(へえ…案外、優しい)といつあるじゃない。ありがと、翡翠

「そつか、ありがと、翡翠」

ちょっとは、見直したかも。

しかし、にっこりしたのも束の間。

再び、ゆすらの笑顔に青筋が浮いた。

「おつ、じゃあさ、次あれ食いたいなつ」

翡翠が、はしゃぎながら『お好み焼き』の屋台を指さしたからだつた。

前言撤回っ！（怒）

どこまで食べるつもりなんだ！このバカ鬼はつ

「だ一め、帰るわよ。もうすぐ夕飯なんだから、我慢しなさい」
「ちえ…まだ食い足りねえよ」

名残惜しそうに、じたばたする翡翠を、ゆすらは引きずつてこぐ。
「仕方ねえなあ、そんじゃ、これでチャラにしてやるか」
「ちょっと、なにする…」

翡翠が、迫つてくる！

「や…んつ」

瞬間、ゆすらの髪が逆立つた。

いや、実際に逆立つたわけではないが、かなりの衝撃を受けたのは確かだつた。

（ちょっと…キス、されちゃつた！？よ、妖怪に
ゆすらの、青かつた顔が、一気に赤くなつていぐ。）

「なつ…な、なつ、なにすンのよつ、この変態ウサ

…？」

ぱ

「んぎゅつ…？」

夕暮れの空に、むなしく音がこだました。

そのあと、殴られた理由が分からず、翡翠はずつと首を傾げていたとかなんとか。

「へんだな　俺、なんか悪いこと言つちまつたのか？」

台所からは、必要以上に大きな包丁の音が聞こえてくる。

一方ゆすらは、トマトのよつに真つ赤になつていていた。

（翡翠のバカ！バカ　…でも…）

いきなりのこと、混乱してしまつたのだ。
でも、叩くことは…なかつたのかも知れない。
ゆすらは一瞬、手を止めた。

「あ、あの～う、ゆ、ゆすら？腹、へつたんだけど」

背中に視線を感じて振りむくと、遠慮がちに、翡翠が話しかけてきた。

まるで叱られた子供が、親に許しを請ひよつた。
あたしも少し、やりすぎてしまつたな。

「ごめんね、翡翠。

「翡翠」

「な、なんだ？」

（ま、まだ怒つてんのか？！）

視線を合わせてきたゆすらり、翡翠は慌てて後じさん。

「ゴハン、もうすぐできるから、待つてね

「え」

にっこりと笑いかけられて、ぽかん、と間抜け面をした翡翠に、ゆすらは、ブツと吹き出してしまつた。

「おま…もう、怒つてねえのか？」

「怒つてないわよ、別に。ほら、お皿並べるから、出してきて

「ゆすら…お前」

（怒つてないつてこたあ、してもいいって事か！？そつなのか、そ

うなんだなつ）

大きなカン違いである。

「な、なに？」

じつと見つめる、彼の視線がヘンに熱っぽい。

病気にもなつたのか？

もしかしたら、撲^うちどこが悪くて、おかしくなつたとか…。

こんばんわ、維用です。↙ ↘ 読者様方、こじまでい君房様です。
↙ ↘ へたじ。↙ ↘ 靑翠、じつや、あすこへぬがあるよう
すねえ。↙ ↘ でも、彼女は…↙ ↘ いひじり期待ください。

恋書　1. こつせみ（前書き）

やがて想いを寄せた彼女は、ついで、彼女に相手へやめられしか
し…

「とつあえず、『ゴハンよ』『ゴハン！』おいで翡翠つぱちん、と妄想が弾けると同時に引っ張られ、翡翠は転んだ。「つて…腹が減つては戦はできん、て言つしな」腰をわすりながら言つ彼を、ゆすらはねめつける。

「なに言つてんだか、はい、『ゴハン』

「おう、あんがと」

ゆすらは、なにかイヤな予感を感じつつも、味噌汁をすすつた。

（戦つて、こいつ…なんかするつもりかしら…）

「おかーり」（おかわり、と言つている）

そう言つて茶碗を差しだす翡翠。

「おかわりつて、もう？」

同じに食べ始めたのに、翡翠の皿は、すべてが空になつていた。

「お前が遅すぎンだよ、食べないンなら、俺が食つぞ？」

「あたしはこれが普通なの、ほら」

「おう」

おかわりしたご飯を、かき込む翡翠に、ゆすらは一筋、溜息をついた。

（なにか、するつもりじや、ないじょーね？）

台所を片付けながら、ゆすらは翡翠の方を見ていた。わつきはなにか、不穏な物を感じたが、今はとことん。そんな様子は、微塵も感じられない。

くわえタバコで、テレビに集中している。

どうだ、この馴染みようは！

まあ、このご時世…人に化けて、生活をしている妖怪は数多い。

あたしの知つている妖怪は、殆どその部類にはいるだらう。

「お、ゆすら…」苦労さん。ほれ、ゴーヒー

翡翠が、さつき自分が飲みかけていたコーヒーを、渡してくれた。

「あ、ありがとう…」

温かい…。

氣を、つかつてくれたようだ。

「どーいたまして」

にっこりと笑いかけてくる翡翠に、自分は不覚にも、赤面してしまつた。

どうもコイツには…こつも負ける。

「ふあー、眠イ

欠伸をしながら台所へ行く彼に、ゆすらは慌てて釘をたたむ。

「翡翠、眠いからって、へんな場所で寝ないでよ…」の前なんて廊下で寝てて、踏んづけちゃつたんだから

尻尾を踏みつぶされた、猫のような声を上げた翡翠には、無傷だったらしい。

「ああ、ちやあんと寝るわ…自分の部屋で」

「よろしく。じゅ、おやすみ」

（間があいたぞ、なんだ…今の間は…）

ちら、と横目で翡翠をぬすみ見る。

昼間の」ともあつ、一応、警戒しているのだ。

「ん…」

そんなことには、全く気づいたふつもなく、彼は、欠伸をしながら元の、黄兎の姿に戻つた。

つていうか、かなり邪魔なんですけど…。

「んだよ、どしたい？寝ないんかよ」

じ つと見あげる翡翠に、ゆすらは慌てた。

氣配は消していたはず。なのに気づかれるとは…

「なつ、別に…言われなくても、もう寝るわよ」

「なあ、なんで、怒つてるんだ？」

背中を向けていたゆすらは、ぴたりと動きを止めた。

「ここからでは、表情を見ることはできない。」

できない、が、その声で彼が、困りきっているのが分かつた。

「こきなり、そんなのって…ないじゃない。キス、初めてだつたの

「」

翡翠の方に向き直つた、ゆすらの顔は真つ赤だつた。

「…それが、なにか問題なのか？」

（は？って、アンタ…どこまでテリカシーーのなのよ（めまい）眩暈を感じたゆすらは、額を強くあさえた。

「毎間のことは、悪かつたと思う…謝る。けど俺、お前がいいんだ。一緒にいると、ここが、あつたかくなる」

翡翠は、そつと胸に手を当てて、唇くちびるを噛み下りた。

そんな翡翠に、ゆすらは、唇くちびるを笑う。

「あたしこは、近づかない方がいいわ…あたしの傍にいたら、必ず、後悔する」

「なつ、なんでだよ！…しねえよ、後悔なんてつ」

「もつおやすみ、翡翠…」

ゆすらは、ぽんと翡翠の頭を撫でて言つた。

「あ…すら？」

翡翠は、凍つたように、その場から動くことができなかつた。彼女が、もう全てを諦めてこらめくな、それでいて、なにかを思い詰めたような顔をしたからだ。

「気持ちだけ、もうつとくな？」

「…」

皿室の障子を閉めて、ゆすらは、ぽつりと呟いたのだった。

始末人（前書き）

翡翠の告白を断つたゆすら。r彼女には、『始末人』としての、変えがたい運命があつた！深闇に潜む妖を、ゆすらが斬る！r

始末人

月夜に、鮮血が舞う。

しかし、その色は赤ではなく、黒かつた。

彼女は血刀の露を払うと、刀を鞘に収める。

黒い外套マントがひとしきり、強い夜風にはためいた。

「ごめんなさいね。これが、仕事なの」

ぽつり、と呟いた彼女に、まるで異を唱えるかのように、風がざわめいた。

強風に煽られてフードが落ち、素顔がこぼれる。

赤みがかつた、茶色の長い髪。

白磁の肌。

他でもない、ゆすらだった。

ゆすらは、二つの顔を持つている。

昼間は大学生。

夜は、この『始末人』としての仕事を手がけるのだ。しかし、彼女は決して、無益な殺生は好まなかつた。客の依頼を、なにかしらの代価と引き替えに、行うだけ。等価交換、と言うやつだ。

「あなたはただ…主の元へ、戻りたかったのよね？化けて出てしまふほどに」

ゆすらは、横たわる一匹の犬の、冷たくなつた頭を撫でてから言った。

懐から、赤い文字の書かれた札を取り出すと、一度手を合わせ、犬の体に札を貼つた。

彼女が貼つたのは、鎮魂札。

傷ついた魂を、慰めるための物だ。

風がざわめき、一瞬にして月が、暗雲に隠れる。

犬に貼られた札が、小さく、炎をあげた。

それから間髪入れずに雨が降り出し、ゆすらの、細い肩を叩いた。

丁度いい。

雨に打たれていれば、少しほは、きれいになれるかも知れない。
穢れたあたしなど、誰が好むものか。

あたしは、獸だ…。

燃えあがつた炎は、雨で勢いこぼは弱まつたが、雨の中でも消えず
に、揺らいでいた。

秋の夜に降る雨は、急速に体温を奪つていく。
ゆすらは雨の中で、夜明け間近の、鉛色の空を見あげた。
髪が吸つた水分が、幾筋も頬を伝う。
それは、彼女の涙のようにも、見えなくはなかつた。

温もり（前書き）

始末人としての自分、それは変えられない事実。r>けれど、こんな自分でも、こんな事は許されるんだろうか？r>あたしは、妖怪である彼を、愛してしまった。

「つたく、むすりの奴。どこ行き……」

ブツブツとぼやきながら廊下を歩いていた翡翠は、玄関先に、頭から足の先まで、ずぶ濡れのゆすらを見つけて息をのんだ。

「ただいま……」

泣きそうな彼女の笑顔に、翡翠の胸がひどく軋んだ。

「お前、どこ行つてたんだよ！散々搜したんだぞつ」

「うん、じめん」

詰め寄つた翡翠は、どこか遠くを見ているような彼女に、きつく、その柳眉を寄せた。

おかしい。

尋常じやない、どうしたつてこいつんだ。

「どこ行つてたんだ？」

「ちよつと、ね……なんでもないわよ」

いぐら尋ねても、虚ろに返してくる彼女に、ついに翡翠の我慢の緒が切れた。

「ちよつとつて何だよ！散々搜したこいつの身にこも……」

瞬間彼は、漂つてきた異臭に、顔を顰める。

彼女の、服に付いている黒い汚れは。

濃い、鉄の匂いがした。

「お前から……血の、匂いがする」

びくり、とゆすらの体がこわばる。

翡翠は、それを見逃さなかつた。

「うん、妖怪を……殺したわ」

「ゆすり……」

翡翠が一瞬、手を引つ込めると彼女は、ひどく傷ついた顔をした。

バレてしまつた。

知られてしまつた。

いつかバレるだろうとは、どこかで分かっていた。

けれど最近は、楽しかったから、先延ばしにして忘れていたんだ。
分かつてたのに。

なのに…。

嫌われたくない。

彼には、知られたくないと思った。

「だから、言つたじゃない…あたしの、傍にいたら、必ず、後悔するつて」

俯いたゆすらの頬を、幾筋も、涙が伝つ。

「ゆすら、俺は…」

「触らないでっ！」

きつと自分は、彼を傷つけてしまうだろう。

嫌われるくらいなら、一人の方がいい。

その方が、痛みが少なくて済む。そう学んだ。

そつと、肩に触れた手を叩き払い、昂然と、ゆすらは翡翠を睨んだ。

「あたしは…アンタまで、不幸にしたくない…父さんも母さんも…みんな、あたしのせい…！」

ゆすらは泣き叫ぶ。

忘れもしない。

あの日の惨劇を…。

「だから、どうしてあたしに構うの…ほつとこ…」「よ
温もりを感じて、ゆすらは、やつと今の状況を理解した。
彼に、抱き締められていた。

「お前の泣き顔は、見たくねえなあ…俺、お前に会えたの、ちつとも後悔してねえよ…」

「離して」

「いやだ」

じたばたと身じろぐゆすらを、翡翠は、そろそろ強く抱き締めた。

「離して」

いくら突き放しても、食い下がる翡翠は、ゆすらの瞳にまた、涙が

溢れた。

「離すか…俺は、どうなつたつていい。お前を、放つとけねえんだよ」

「翡翠い…」

「一人で抱え込むな、辛かつたら全部、吐き出しちまえばいい。俺が支えるから」

「え…？」

ゆすらは一つ、瞠目する。

あたしが怖くない、と囁つかののか、この男は。

妖怪なら、恐れるのが当たり前なのに。

「ホントに、あたしが怖くないのね？」

「ああ、だから…もう、泣くんじやねえよ」

「つくしゅん…」

返事をしきりとしたあらだつたが、代わつてくしゃみが出てしまつた。

「お前ッ、びしょ濡れじやねえかー早く着替えてこよつ」

「うん、やうするわ

翡翠は、そつとぬすりを離してやる。

口口口口と、浴室に向かつ後ろ姿を見送つて、溜息をついた。

「さて、なんか食つかなー」

時間、事態に関係なく、翡翠は粗変わらずマイペースだつた。

居間で煎餅を片手に、茶を啜っていた翡翠は、肩に重みを感じて振り向いた。

ゆすらの頭が、乗せられていた。

「なした？」

「あつたかいね、翡翠」

擦りよつてくる彼女が愛しくて、翡翠は、ふつと笑みをこぼした。

「お前が冷えすぎなんだつてえの」

「いひしてると、なんか…安心するね」

そう言つて、ゆすらは瞼をおろす。

だつて。

今まで、誰にも寄りかかつたことなんて、なかつたんだもの。温もりが、こんなに心地よいなんて、忘れてたのよ。

「こうした方が、もつと温かいんじゃねえか？」

「え

」

いつの間に、変わつていたのか。

すべらかな、毛皮の感触と、温みを感じて、うつうつとしていたゆすらは、慌てて顔を上げる。

本体…妖怪である、黄兎の姿に戻つた翡翠が、そこにいた。

「翡翠…」

兎化した翡翠は、慰めるようこゝに、ゆすらの手に頬ずりをする。

「お前、いつも悲しい瞳めをしてゐる。その悲しみを、俺は消してやりたい」

「ずっと…覚悟してきたわ。誰も、好きにならないよつて怖れていたことが、起つた。

彼を、好きになつてしまつた。

けれどそつしたら、自分は戒めを忘れててしまつ。

言つたゆすらの頬を、また、涙が伝つた。

「なぜ？」

なにも応えず、ただ涙を流す彼女に、翡翠は人の形に戻つて尋ねた。

「悲しみを、増やさないためよ…あたし達の一族は、常に死と隣りあわせ。一族といつても、あたしが、最後の一人なんだけどね」涙を拭つて、ほつりほつりと、ゆすらは重々しく語りだした。

翡翠はきつく、唇を噛みしめる。

他の者はどうしたと聞くのは、愚かなことだ。

もう、分かりきつてゐる。

どんなに辛かつただうつ。一人だけ残され、詩の影に怯える日々が。

「死なせない」

「え？」

涙の、たくさん溜まつた鳶色の瞳が、翡翠をじつと見据えた。

彼女の頬を伝う雲を、翡翠は玻璃のようだと思った。

「死なせねえ、死なせはしねえ……俺が、守る」

（ここに誓おう。俺は、お前を一人にはしない！）

瞬間、激しい脈動が彼女を灼いた。

ゆすらの中で、記憶の糸が、一つの映像を結んだ。

（以前にも、同じ事を云つた人がいた。守るから、と）

燃えさかる母屋。

まだ幼かつた自分は、兄の腕の中で、その光景を見ていた。

『ゆすら、もう泣くな……父上と母上は、定めを全うしたんだ。いいかい、なにがあつても、泣いちゃいけない……状況は、俺たちを待つていてはくれないんだから』

『兄さま、兄さまも、定めを全うする？』

怖かった。

父と母を一度に失い、これ以上、泣くのが嫌だつた。

『いつかは。だが今は、お前を守るよ。だから、もう泣くんじゃない』

『うう……』

年の離れた兄は、いつもあたしを守つてくれた。

あたしも、少しずつ戦術を教わりながら、兄と共に、妖怪達と戦つた。

一族殲滅を、狙う妖怪も減つていき。

安穩に、10年が過ぎた。

いや。

安穩であるように、見せかけていたのだ。

妖怪達は、意外な手段で、兄を屠つた。

あたしが18の夏

兄が死んだ。

交通事故だった。

荷物を積んだ、駐車中のトラックがつっこみ、即死。

出棺前に触れた、頬の冷たさが、今も忘れられない。

触れた頬は冷たくて。

白く清められた兄は、別人のようにきれいで。
もう、誰も失いたくない、と思つた。

もう、誰も。

悲しい涙を、流さず済むように。

その日、定めと戦うと決めた。

あたしは、その日から始末人になった。

「やだ、やだよつ…独りにしないでつ、あたしを独りにしないでよ

「お

ゆすらは、翡翠の胸に顔を埋めて、声の限りに泣いた。
今まで押し込めていた思いを、全て、吐き出すように。

「泣きたいときは、泣くといい。俺が傍にいるから」

ポンポン、と幼子をあやすように、ゆすらの背中を叩いてやりながら、翡翠は言つた。

「温かいよ、翡翠」

「おい口ラ、鼻かめ…鼻…ほらティッシュ」

胸板に頬擦りするゆすらに、翡翠は慌ててティッシュを渡す。

「ありがと」

「独りにや、しないと思つぜ? だつて俺、お前から離れるつもりないし」

心配するな、と伸ばした彼の手を、ゆすらは、するりと除けた。
唇に、柔らかな感触が重なる。

翡翠の目が、大きく見開かれた。

(予想不可能…女つてフシギだ。でも、嬉しいからいいや)

「好きよ、翡翠…あんたが、好き」

ゆすらの手が伸びてきて首にまわり、顔が近づく。
口づけを促すように、ゆすらが目を閉じた。

翡翠は初め、そつと触れるだけのキスをする。

抱き締める腕に力を込めるとき、ゆすらから甘い吐息が漏れた。

いとおしむように、深く口づけ合い、勢いが余つて、二人一緒に床に転げても、互いに離れることはなかつた。

お客さん？（前書き）

靈感少女で、実は、妖怪始末人のゆすらと暮らすウサギ妖怪・翡翠。相思相愛なのはいいが、翡翠の前に、留守中だつた猫又・一牙が現れた。ライバル出現か！？

生欠伸をしながら、仰所に立つむすりの體中を、翡翠は抱き締める。

「んもう、邪魔よ翡翠…鬼にでもなつててちょうだい」

引き剥がそうとする、むすらの首筋に、翡翠はキスをした。

「ちょっと…やッ…」

「いーだら別に。気にすんなよ」

「充分気になるわよ、早く離れてくれないと…また、数珠で縛られたい?」

につじりと笑いながら（+青筋付）、「むすりは、Hプロンのポケットから数珠を取り出す。

すると、翡翠は『わーん、むすりのこじめっ子ー』と、のたまいながら、居間に避難していく。

やれやれ、である。

最近は、少し疲れ気味なのだ。

居間に避難した、あこいつのせいで。

はふ、と溜息をついてから、むすりは朝食の仕度を再開させる。煮立ちかけた味噌汁を、ガスコンロから降ろし、火を消した。

その頃翡翠は、小型化してソファの上に転がっていた。鼻の頭にシワを寄せ、ガジガジとトレーピのコモロンを齧る。どうやら、拗ねているようだ。

「むすらの奴、最近、なんか冷てえよ…なんでだよ」

じたばた、とソファの上で暴れる翡翠を、むすりはと抱き上げてやつた。

「いーら…コモロンは食べちゃダメって、 entendidaでしょ?『ハント

「うー…」（まだ怒つてゐる感じ）

「なに怒つてんのよ、『ハント冷めちやうよ?』

「お前つ、最近冷たい…」

ぽんつ、と人の姿に戻つた翡翠は、ゆすりに詰め寄つた。

「寝不足だつたのよ、ごめんね？」

「キライになつたんじや、ないのか？」

「まさか…へんな翡翠

「なつ、な…」

「ほら、早く食べなきや…ゴハン冷めちゃうわよ」

みごとに惚けた顔をした翡翠に、ゆすらは苦笑してしまつた。

「悪かつたな…疑つて」

決まり悪そうに唸つて、目線を、ゆすらから逸らす翡翠。

「やっぱりカワいいね、あんた」

「お前こそ」

「今日は忙しくなるわ、早く済ませちゃわないと、帰つて来ちゃう」
しなだれかかつてくる翡翠を、なんとか押し返しながらゆすらは微笑んだ。

「誰か、くるのか？」

おかげを頬張りながら、翡翠が尋ねた。

「ああ、うん…今日は一人だけだけどね。でも、アンタには…ちよ
つとマズい相手かも」

「そいつ、妖怪なのか?なにがマズいんだよ」

漬け物を囁りながら、言つてくる翡翠の仕種が可笑しくて、ゆすら
はブツと吹き出した。

その仕種が、あまりにもウサギっぽかつたからだ。

本人に言つと、かなりへこむので、それは心の中に留めておくことにした。

「ええ、今日帰つてくる居候さんは、一牙つていってね、里帰り中

…

ゆすらは、そこまで言いかけて言葉を止めた。

窓の外に、本人の気を感じたからだつた。

翡翠は、ぎょっとベランダを凝視する。

窓の外にいたのは、赤毛の青年。

彼は、当たり前のよつてべランダで靴を脱ぐと、ふるふると頭を振つた。

「ひ～…やつぱ日本は寒いなあ」

「だから一牙、こつも言つてるじやない…ベランダから入つてこないでつて」

「まあまあ、固い」と言つこなし。たーだいまつ、ゆーすり「ぐえつ…?」

ゆすらが、一牙と呼んだ青年は、彼女の隣りに座つていた翡翠を踏んづけて、ゆすらの膝に甘えた。

一方、潰された翡翠は、その下で黒いオーラを発してくる。

「てーめーえー…ヒトを踏んづけやがつて！ ゆすらから離れりつ」
がばつと、起きあがつた翡翠から飛び退いて、一牙は身軽に着地した。

「およ？ ゆすりあ…誰だ？ イツ、2号さん？」

スリスリ、と懐く一牙を押し返しながら、ゆすりは溜息をついた。

「へんな言い方しない…誤解されるじやないの」

「んなつ…」

翡翠は一瞬、言葉に詰まつた。

一牙とかいつ、この男。

なんていうか…。

いけ好かない。

「つてゆーか、お前が誰だよーしかも、俺は2号じやねえつ
「ジョーダンよ、冗談…そんぐらこでマジになるなよなあ…頭力タ
イねえ」

「ンな冗談、一度と言つこじやねえ…」

へらへらと笑う一牙に、わなわなと拳を握る翡翠。

やれやれ、と首をすくめる一牙に、翡翠が食つてかかる。
見ていてまるで、そこだけコントのよつだ。

実は、翡翠が相手じやなくとも、苦労性なゆすらなのだった。

「一牙、このヒトは翡翠つてこつて、黄鬼なの」

「へええ、新入りか」

一牙は興味ありげに、翡翠を上からトキまで、じりくつとねまわした。

「ふうへん、黄兎ね…聞いたことあるぜ？俺も回り（中国）の、
秦嶺出身だし。よろしくな、新入り」

「おひ」

ぶすくれ顔で、一牙を睨む翡翠。

翡翠は、面白くなかった。

踏んづけられた上に（別に、痛くはなかったので、これはいいとして）、ゆすらの隣を取られたことが、なんとも腹立たしいのだ。

（こいつちのが、かなり深刻だよ…）

しかも、この様子からして、たぶん居候はコイツだけじゃなぞやつ

だ。
恋敵多し！
ライバル

「はあ…寂しかったぜえ、やつぱ、お前の傍が一番だよ」
翡翠が、そんなことを悶々と考へているウチに、一牙は、ゆすらの膝に寝転がつて甘えていた。

一牙の猫なで声に、ぱちん、と翡翠の妄想が弾ける。

翡翠の頬に、青筋が浮いた。

「くつくなつて言つてんだろ！猫みてえにベタつきやがつてつ」
一牙を引き剥がすと、翡翠は、強くゆすらを抱き寄せ、庇つた。
「だつて俺、猫だもん…お前にい、ひつじてんだ。お前さあ、
ゆすらの何なわけ？」

面白そうに、にやつて一牙。

「おひ、俺はだな、てめーみてえなヤツから、ゆすらをやつてんだ
よ」

「ふうん、用心棒つてわけ。じゃあ、お前のモント言つさじやない
んだね」

まさに、口からでまかせ。

ウソハ百。

そらに「墓穴を掘り進む翡翠である。

「ぐつ、そうだ…しつ、仕事だよ。邪魔すんじゃねーぞつ」

「さあねえ…俺さあ、気まぐれだし。猫だから」

なぜか力んだ翡翠を、更にからかうよつに、一牙は悪戯つぽくペロリと舌を出して見せた。

「んなつ…」

「あー……冗談だつて冗談、まつたく…すぐ頭に血が上る。落ちつきなよ、妖怪だつたら、誰だつて寄りたくもなるさ。ゆすらの旨そうな気に惹かれてなあ。お前もそのクチだろ?」

悪びれずに言う一牙に、翡翠は息を詰まらせた。

無意識ながら、傍に感じた安心感は、彼女の濃く、強い靈気のせいだと、今になつて分かつたからだつた。

「お、お前だつて、そうじやねえのかよ!」

全くもつて面白くない翡翠は、一牙に噛みついた。

「お前だつて、ゆすらの傍にいるじゃねえか!なんか、狙いがあるだろ!?」

一牙は、くつ、と失笑すると、肩を揺らして、大笑いし始めた。

「なつ、なにが可笑しいんだよつ!」

カツとなり、翡翠は怒鳴る。

「失礼、あんまり可笑しかつたんでね。だけど…もの言いに気をつけな、ガキが」

翡翠の背中を、一筋、冷たい汗が伝つた。

一牙から、殺気にひどく似た、苦い気配を感じたからだ。

「狙うなんて、とんでもねえ…俺は勿論、他の奴らも、みな昔から神崎一族を護つてんだ、分かつたか。解つたなら…もう余計な詮索はナーチ」

「へ?」

急に表情を崩した一牙に、翡翠は拍子抜けしてしまつた。

なんだ、コイツは。

やつぱり、よく分からん…。

猫は、キレイだ！

「ゆ～すら、俺が全部護つてやるからなあ」

（ブチッ…）

台所を片付けてくる、ゆすらの背中にぶら下がつている猫一牙を見た翡翠に、本田、いくつ田かの青筋が浮いた。

「ありがと、でもね一牙…プライベートまでは遠慮するわね？ちやんと間に合つてるし」

ねつ、とゆすらは翡翠にウインクする。

そんなことで納得（満足？）してしまつ、単純な翡翠なのだつた。

「ちえー…つれねえの、誰だよやつ、ひらやましこヤツ…」

「猫一牙は、不機嫌に尻尾を振ると、階段を昇つていつてしまつた。

「やれやれ…翡翠、まだ怒つてるの？」

「俺、あいつキレイだ…いけ好かねえ」

黄兎に戻つた翡翠は、背中の毛皮を逆立たせていた。

ゆすらは、おいで、と手招きをして、寄つてきた翡翠の首を、優しく抱き締めた。

「ゆすら…」

翡翠は動搖したらしく、耳を細かに痙攣けいれんさせる。

「いい？翡翠…あたしが好きなのは、アンタだけよ？特別つてこと、分かるわね？」

「お、おう…」

潤んだ鳶色の瞳に見つめられ、翡翠は戸惑つた。

いつも彼女と、なにか雰囲気が違う。なんというか、濃厚な色氣があるような。

ちよつと、やばい…かも。

「ふかふか…あつたかーい」

どうやら、そんなことを考えた（妄想した）のは、自分だけだったらしい。

「ぐつ、苦し…」

ゆすらは、ぬごぐるみを抱くように、翡翠を抱きすくめた。

「おひきな、ぬごぐるみみたいー…かわいー
可愛がってくれるのは嬉しいが…これでは、まるでペシトだ。
『もつと別な形で、可愛がってくれると嬉しい』などと、不埒なこ
とを考へて、『…』

「放せぬすり…苦しいぞ」

「やだー」

「死ぬつて、『…』」

「ウソつナ

「ウソじやねえつて、放してくれよ…」

結局その口は、やさりの枕になつて終わりだつた。
なんの、進展もないままで。

部屋に戻つた翡翠は、深く溜息をついたのだった。
(まあいこ…じつへり、のんびり行くぞ)

そんな小雨降る、秋の夜更けのこと。

こんにちわ、維月十夜です。『のんびり行こうよ?』新章のお届けです。これまで、読んでくださった読者様方、感謝です。それでは、やすらと翡翠の恋模様を、お楽しみくださいな

あわやー（前書き）

靈感少女で、妖怪始末人の彼女・ゆすらと甘い生活を送っている翡翠。帰ってきた居候・猫又の一牙も加わってちょっと一波乱の様子。さらに、ゆすらの（数少ない）人間の友達が遊びに来ることになつて！？

今日のゆすらは、なんだか忙しそうだ。

掃除機とやらをかけたり（床に寝ていて、2度ほど轢かれたが。）窓を拭いている。

「なあ、誰か来るのか？」

窓を拭いているゆすらの膝に、小型化した翡翠が、ちょこんと前肢を乗せた。

「友達が来るのよ……」最近、掃除サボつてたから、やり『たえあるなあ』

腰を擦るゆすらに、翡翠は人の姿に戻った。

「友達つて、人間のか？」

言われて、ゆすらは一つ瞠目した。

したが、職業柄、人間より、妖怪の知り合いの方が多いので、特に気にはしない。

「そう、綾子つていうの。旅行の時に一緒にいた子よ」翡翠は、膽に、ゆすらがあの時、人を待たせていると言つていたのを思いだした。

「ああ、あの時のな」

「で……お願いがあるんだけど、聞いてくれる？」

「願い？」

嫌な予感に、翡翠は小さく身震いをしたのだった。

「なんでだよ、フツーの兎のふりしろつて……無理だつて！」

「お願いよつ、だつてビックリするでしょ？ペットは喋らないの。イン』が鸚鵡以外はね」

「じゃ、念話ならいいか？よつほど鋭いヤツじやねえと聞こえない」不機嫌に、鼻の頭にシワを寄せた翡翠を、ゆすらはそつと撫でてやる。

「ええ。悪いけど、そうしてちょうだい」

「仕方ねえなあ、じゃあ報酬は…」

言つた瞬間、唇に柔らかな感触。

啄^{つけば}むような優しいキスに、翡翠は、目を剥かずにはいられなかつた。

「これで、どう?」

へたり込んだ彼を抱き締めて、悪魔的に、ゆすらはにヒヒと微笑んだ。

「…分かつたよ」

彼女の腕の中で、翡翠の姿が歪む。

小兎になると目を閉じ、スリスリとゆすらりの胸に甘えた。

「つか……………」

どこからか聞こえた一牙の声に、翡翠は慌てて飛び起きた。

「なつ…てめえ、見んじゃねーつ

赤毛の子猫になつてゐる一牙は、テレビの上に寝そべりながら、翡翠を茶化す。

もしその時、翡翠が人型だつたなら、やかんの様にまつ赤になつてゐるだらう事は、ほぼ間違ひないだらう。

「ゆすらも、なーんで…こんなガキがいいのかねえ」

「るせえつ、年増は縁側で伸びてろつてんだ!」

翡翠も、負けじと背中の毛を逆立てて毒を吐く。

「おう、やんのか?ガキンちょ…」

ぎやこぎやこ、とやかましい一匹。

犬猿の一匹を放置しておいたら、どんなことになるか分かつたものではない。

「ああ、こら…やめなさい、一人とも。翡翠もね、いい子だから」と、ゆすらが一匹を止めた瞬間、同時に呼び鈴が響いた。

「おましみたいね。はい！」

「う、」

翡翠は、鼻の頭に最大級のシワを寄せていた。

なにを隠そう、不機嫌なのだ！

ゆすらの友人（綾子とかいうヤツ）は、ビリヤー無類の動物好きのようだった。

「うちが疲れるほど、執拗に構つてくるのだ。

「あら、ウサちゃんがいる！ だっこしてもいい？」

綾子は手放しに喜ぶと、翡翠を抱きあげた。

「うん、この子、翡翠つていうのよ？」

（怒ってるわね、大丈夫かしら？）

ゆすらは内心、一人じめる。

（ウサちゃん！ ウサちゃんだつてよー…ああ、腹いてえ）

テレビの上で笑い転げる一牙に我慢できず、翡翠は前足で、シッシツという仕種をした。

（うるせえな、バカ猫… どうか行きやがれ！）

「フフ…」

「おとなしいねえ、よしよし…」

いきなり、ムギュウウ、と頬を寄せてきた彼女に、翡翠は慌てて顔をそむけた。

（ぶへつ… オイゆすら、「イツ、なんか臭え！ 鼻につーんときたつ）
花か、なにかとも異なる臭気が、翡翠の小さな鼻を灼いた。
内心、早く離して欲しい、と切に願う翡翠である。

（ゆーすーらー… 早くどうにかしてくれ、鼻がもげる）

「あ、綾子… 翡翠、そろそろ返してもらつてもいい？」

ゆすらが、助け船を出して受け取つた翡翠は、心なしかぐつたりしている様だ。

「うん、またね、翡翠ちゃん」

名残惜しげに、綾子は翡翠を一撫でした。

（ちゃん、じゃねえつ…俺あ男だ！）

床に降ろしてもらつた翡翠は、念入りに、身繕いを始めた。
「嫌われたかな？」

「ううん、大丈夫。あの子、人見知りするのよ」

ははは、と軽く笑つて誤魔化すが、翡翠の視線が痛い。

（怒つてる、すつしりく怒つてる…）

「そつか…」

なにか、寂しげな雰囲気になつてしまつたので、ゆすらは急に素つ頗狂な声をあげた。

「あ、ちよつと待つて…あたしつたら、お茶も出さないで。淹れてくるね？」

ぱたぱた、と台所に走つていつたゆすらを見送つて、綾子は、足元に寄つてきた猫一牙を抱き上げた。

「ねえ、ゆすら…なんか変わつたよねえ？」

一牙は、にやあと鳴いて、曖昧に相槌をうつてやる。

『それは、俺にも分からねえ』と、左右色々しがいの瞳を、三日月の形に細めて見せた。

「一牙と、なに話してたの～？」

蓬色の湯飲みにお茶を注ぎながら、ゆすらは上機嫌に尋ねた。

「一人だけのナイショ。ねつ、一牙」

困つたように、ぶみやあ、と鳴いた一牙には、後でたつぱりと事情聴取を受けてもらつことにして、ゆすらは『そう』と笑みを返した。
『そうそう、ゆすら…サークルの話なんだけど、あんまり顔出さなくなつたじやない、どうしたの？』

テーブルの下でぶすべくれていた翡翠は、どうも話について行けないようで、頭には無数の、クエスチョンマークを浮かせている。

（せ、わあくるつて、なんだ？）

「バイトとか、最近忙しくてね

（誤魔化し、きくかしら…）

内心、またもハラハラしたが、これも通つたようだ。

「そつなんだ、ここだけの話なんだけど、アンタ、結構モテてたじやない？ほら、あの…えへつと、なんていう名前か忘れたけど、サークルの男連中の中で、アンタに気があるつてヤツ。そいつに、昨日しつこく聞かれちゃつてわ…」

(ぬあにー? ゆすら、本当か?)

勢いよく起き上がった瞬間、すこいつ、とテーブルに頭をぶつけた翡翠は、危うく声を出しちゃうになり、なんとか、鼻を鳴らしてその場を誤魔化した。

(ぬおおお

つ、俺といつ男がいるってのになーつ) テーブルの下で、頭を抱えて苦悩する翡翠だが(一見には、痛がつているように見える。)、ゆすらの一言に、ぴたりと動きを止めた。

「困るわ…それに、余り憶えてないのよ。誰がいたかなんて」

「代わりに、断つといつか?」

「ええ、そうね、お願ひするわ」

うるうる、と大きな瞳を潤ませる翡翠。まつたく、現金なのだ。

ほつ、と安心した様子のゆすらに、綾子は、にんまりと笑った。

「アンタの好きな人って、どんな人?」

「えつ、なつ、なんで?ー」

まさか、聞かれるとは思つていなかつたのだ。

ゆすらは、酸素不足の金魚のように、口をぱくぱくさせた。

「分かるわよう、それくらい…アンタを見てればね。なんか雰囲気が変わつた、柔らかくなつた、つていうのね」

そもそも、とテーブルの下から出てきた翡翠が、グイグイとゆすらの腕の中に頭を押し込む。

居すまいを整えると、幸せそつて田を締め、ペロペロとゆすらの頬を舐めた。

(じじにいるだろ? じじに…)

「そうね、我が儘で、口が悪くて、態度もでかくて…」

彼女の言葉に、少なからずめり込む翡翠。

「でもね、好きなの」

「こりや、かなり重傷だわね…」

うつとりといつゆすらに、綾子は呆気にとられる。

しかし、少し違和感を感じて、綾子はゆすらを見た。

（「Jの子の想い人つて、まさか…）

いや、正しくいうなら、ゆすらに熱烈なキスをしている翡翠をだ。

彼女といで、平気な男がいるだろうか？

失礼な考え方だが、見えないモノが見える彼女なら、あり得ないことではない。

なぜか、JのJの『カン』だけは鋭い綾子である。

「それって、まさか… Jの子？」

綾子は、翡翠を指さす。

がちん、と一気に石化するゆすり。

翡翠は相変わらず、熱烈なキスをくり出している。

石化したが、なんとか持ち直し、誤魔化し通すことには成功した。

「やあだ、なに言い出すかと思えば… Jの子は、あたしに懷いてるだけ。好きな人は、別よ」

「そう…？あんたのことだから、てっきりその子が妖怪で…とか言うかと思って」

「なに言つてんのよ、もつ」

（うーん、さすが…鋭い、全部あつてるわ）

誤魔化すことに精一杯で、違う意味で田を潤ませている翡翠に、ゆすらは気づかない様だった。

綾子が帰った後、一番苦労したのが、拗ねた翡翠のフォローダつた。

「どーせ俺なんて…」

とか何とか…。

始終、夜のベッドの中で呴かれては、堪つたものではない。

「もー…だから、ゴメンと言つてるじゃない」

「すげえ、傷ついたんだけどなあ…」

子供のように聞き分けのない彼に、泣きそつこなる（すでに半ベソ）。

「もー…こい加減にしてよー」

翌日、ゆすらは、腰痛で起きあがれなかつたという。

人生…楽あれば、苦あり。

ここは一つ（どういいう数え方だ…）、のんびり行きましょうや？

あわせ一（後書き）

こんばんわ、維月十夜です。↙ ↘ 読者様方、こじまで「苦勞様です。↙ ↘ 今回、『のんびり行こうよ。』ひよつと靈犀×ゆすらの、なにげに18禁ぽくなってしましました。↙ ↘ 知識もないクセに、稚拙です（↙ ↘ ）↙ ↘ こんな作者でもよろしければ、今後ともよろしくです。↙ ↘ それでは、失礼致します。

甘い生活を送る翡翠とゆすら。
しかし、予期せぬ悲劇が一
人を裂いた！
やはり、人と妖怪は相容れないのか！？

>人に恋をした妖怪は、制裁を受けるのか！？

蒿里の麓
ひらのふもと

青い釉薬の瓦が美しいそれは、傲然とそびえていた。

蒿里とは、中国が靈山・泰山の西側に位置する、同系列の靈山だ。

蒿里の麓にそびえる、館の一室。

そこだけ光が入らぬように、部屋全体に、闇色の布が張つてある。一人の男が、掌に握つた水晶球を覗いていた。

水晶球に映るのは、人間の娘と口づけあう息子・翡翠の姿。

「あいつめ、あくまで戻らぬつもりか！」

ビクリ、と男が身じろぐと、琥珀色の絹糸が流れて、外套の様に背中をおおつた。

ぱりん、と握りしめた水晶球が、光を撒いて砕ける。

「目障りな。人間など…」

「お館さま…あたくしに、お任せくださいな」

憤然と吐き捨てた彼の背に、鈴を転がしたような、甘い声が言った。

「朱明か…」

お館さま 翡翠の父・瑞慶は、ニヤリと笑つた。

「して、どうする…あいつを連れ戻すとでも申すか」

「いいえ、逆で」「いいます。少し、座興を思いつきました」

ほつそりとした、柳腰の美女・朱明は、くすりと含み笑つた。

「ほう…座興とな、おもしろい、申してみよ」

「はい」

「つしゅん！」

夜明け頃、なぜか目が覚めてしまつたゆすらは、悪寒を感じて、きつく自身を抱き締めた。

「こんなに不安なのは、どうして？」

翡翠との関係が深くなる度、心にざわめくモノが生まれるのだ。

すぐ隣で、寝息を立てている彼を起こさないよつて。ゆすらは、そつとベッドを抜けて身支度を整えた。

なにかが
なにかが
これは勘だ。

動きだした。

自分には分かるのだ。

始末人としての、本能がそう言つてゐる。

ゆすらは夜明けの薄闇に溶ける、黒い外套マントを纏い、刀を佩いた。

「お嬢様、先刻から、屋敷の周りをうろつく輩やがあります。獣の気配のようですが…いかがなさいますか？」

玄関に立つ彼女の、足元の影が膨れあがると、青い双眸を持つ黒い顔が、ゆらりと起きあがつた。

ゆすらの影の中から現れた、彼の種属を闇鬼ヤミモトといつ。

彼は、一牙を始め、古来より、神崎一族に忠実に仕える妖怪だ。

普段は、床下に潜んでいる。

「行く…隼人、お前もきてくれ」

「用心のためです…仰せのままに」

にこり、と穏和に微笑むと、隼人は影に溶けた。

ゆすらの顔つきが、一瞬にして変わる。

闇鬼である、隼人が憑依したせいもあるが、彼女の鋭い眼差しは、始末人として元々のものだ。

「こうなつた上は、定めを果たさねばならぬ…」

言つたゆすらの声は堅い。

それだけの意志を、秘めているからだ。

「やれやれ…こんな極東の島国まで来るほど、あたしはひどいやないのにねえ」

大門の屋根に、小鳥のよつよつとまつていた朱明は、剣呑にゆすらを見下した。

「貴様、何者だ」

一触即発な気配に、ゆすらは刀の鍔口ハグロを浮かせて、低く構えた。

「おやおや、強気な」と…あたしは朱明。ふうん…お前が翡翠君の女か

フン、と鼻で笑われ、カツとなつたゆすらは、朱明の足元を払つた。しかし朱明は、ふつわりと身軽に斬撃を除けて、飛びのいた。

彼女は、決して親しみを込めて翡翠を呼んだのではない。

君、とは身分の高い者への敬称なのだ。

「なにが目的か！話によつては、容赦はしないぞっ」

「おや、まあ…それじゃあ話が早いね」

瞬間、乾いた音と共に、ゆすらの刀が弾き飛んだ。

「は、早い…」

田に留まらぬ早さで、こきなり朱明は、ゆすらとの間合を詰めた。

「刀を使つなら、もつと手際よくなくちや…」

朱明の手が、ゆすらの首を掴み上げる。

女の細腕なのに、万力のよつてきつと、ゆすらの喉を締めあげた。

「ゆすら、ゆすらを放せ…」

「翡翠…」

玄関から、飛び出してくる翡翠の様子が、ゆすらにはスローモーションの様に見えた。

「朱明っ！？ゆすらを放せっ」

駆けつけた翡翠は、遠巻きにしか近づけなことには歯がみをしながら、必死に叫んだ。

「やつとお出ましかえ？翡翠君、アンタに直接恨みはないけれど…これも、お館さまのため！」

朱明の左手に雷が集まり、それは急激に膨張しながら、ゆすらへと放たれた。

翡翠の、田の前が白く染まる。

彼の中で、警鐘が鳴つた。

逃げる、逃げてくれ！

ゆすら、逃げる！

お願いだからつ。

ただ、それだけを。

くり返し、くり返し叫び続ける。

雷を帯びた彼女は、まるで、枯れ葉の様に宙を舞つた。

翡翠の頬に、鮮血が散つた。

「ゆすら

つ、ゆすら…？」

「触るなつ！」

崩れ落ちた、ゆすらに走り寄つた翡翠に、朱明は牙を剥いた。

「この娘の命が惜しくば、追つてくるがいい！ できればの話だがな。この娘…あたしが貰つたつ！」

朱明は、小山ほどの赤兎に変化すると、ゆすらを銜えて消えた。

「ゆすら…朱明、貴様

…」

（何をするつもりだ、朱明…くそ、俺がついていながらつ）地面にへたり込んだ翡翠は、襟首を引っ張り上げられて、やつとその気配に気がついた。

「ゆすらの気配が消えた！ この血の匂いはどういう事だ！ ？ 聞こえてんのか、このクソ鬼！ その耳、引きちぎるわ…」 説明しうつ

「一牙…ゆすらが、ゆすらが、連れてかれちまつた…」

弱々しく言つた翡翠に、カツとなつた一牙は、翡翠を思いきり殴り飛ばした。

「てめえの仲間か！ ？ お前と同じ匂いがしやがるわ、てめえをえこなけりや…出逢わなけりやあ」

「ゆすら、俺のせい…あんな事になるなら、出会わない方がよかつたのか？」

血まみれの彼女を思い出し、再び瞳に涙が溢れる。

蹲つた翡翠は、まるで、迷子になつた子供の様に声を上げて泣いた。

止めどない、自責にかられて、翡翠の喉は嗚咽を漏らす。

「チッ…これだからガキは。ゆすらは必ず連れ戻す…例え、この命消えようともわ」

「へ？」

鼻を啜つて振りむいた翡翠に、一牙は額を抑える。

「分かんねえヤツだな…だからもう、ピーピー泣くんじゃねえ！協力してやるって言つてるんだよ」

ぶつきらぼつに言つて一牙は、ばしんつ、と翡翠の背中を叩いた。

「つて…一牙」

「協力つても、ちつとだけだぞ！てめえら黄兎の領域^{ナコトコト}に、俺は行けねえからな」

「すまねえ…俺、絶対ゆすらを助けるよ」

ふいっ、と背を向ける一牙に、翡翠は田尻を下げた。

「当たり前だ、もたもたすんなよ？ガキンちょ、こいつなつたら急がば回れ、行くぞ！」

一牙は、地面に左手を置くと、田を閉じて氣を集め始めた。
時空路^{じくうじゆ}を開いているのだ。

時空路は、ごく稀に使用することができる人間がいるのみで、その主は、妖怪が使う術^{きもんとつけい}なのだ。

またの別名を『鬼門遁甲^{きもんとんじゆう}』といつ。

「一牙」

「あん？」

「借りができたな」

背を向けたまま言つた翡翠に、一牙は怪訝な返事を返した。

「ばかやろうが…倍にして返しやがれ」

深闇の中に、道がある。

彼らには、本能で判るのだ。

それが、時空路。

一牙は、開けた入り口が閉じるのを感じて、後ろを振り返った。

ども、維月です。＜br＞読者さま方、はじめで、『じゅれい』まで、『じゅれい』まです。＜br＞翡翠とゆすらの恋模様。＜br＞一筋縄ではいきませんね。（笑）＜br＞自分で言つのもなんですが。＜br＞それでは読者さま方、次回、どうなるのか』想像ください？＜br＞展開に、『つい期待！＜br＞それでは、失礼致します。

幻惑（前書き）

恋人・翡翠と引き離されたゆすらは、強敵・朱明の術中に陥つてい
た。
「**ル**」靈感少女で、始末人の神崎ゆすらと、態度がでかくて、
口の悪いウサギ妖怪・翡翠の珍道中（ラブコメ風味）。

「どこまでも、見わたす限りの黒い世界。
ゆすらは、一條の光も届かない、闇の中にいた。

「「」は、ど」？」

問い合わせる声は、響きもせずに、くるりと虚空が吸い込んだ。

「靈翠…」

ぼつり、と呟いて座り込んだゆすらは、急に人の声を捉えて、慌てて立ちあがった。

「声が…！」

しかし、ゆすらは、その目を大きく剥くことになる。

「ねえほら、見てよ…来たわよ、例の『靈感少女』氣味悪い
「あの人つて、気さくだけどさ…なんか暗いよね」
「そうそう、なんていうか…あれ、近寄りがたいつてヤツ？」
「そういうば、あの人…天涯孤独らしいよ？」
「うそ、マジい？それ」

「うん、らしいね…友達が同じサークルでさあ」

ゆすらの前に現れた人影は、大学のクラスメートである、数名の女子だった。

ああ、そうだった…。

急速に、ゆすらの表情が、翳かげつていいく。

陰口。

冷たい視線。

やはり、自分たちとは違つ者を、人間は攻撃・および隔離する。
そんなもの、もうとっくに慣れたはずなのに。
なのに。

凍えてしまいそうだ。

次第に、声同士が重なり合ひ、よく聞き取れないノイズとなつて、ゆすらに迫る。

怖れ。

不安。

好奇心。

妬み。

嫌悪。

さまざまな念が、黒い炎となつて、彼女をあぶり出した。

無数の目が、ゆすらを見る。

ゆすらは、走り出した。

走つても、いくら走つても途切れる事のない、永劫の闇。

転んで、つまづいても。

立ち止まつているヒマはない。

無数の目は、ざわざわとノイズを伴つて、追いかけてくる。もう、逃げられない。

彼女が足を止めた瞬間。

目の前の足場が、突然に消えた。

「…ああっ！－！」

落下していく体。

どこまでも果てなく墜おちて。

このまま、終点に叩きつけられるのか。
きつく目を閉じた刹那、彼女の背中は、固い地面の感触を捉とえていた。

一つ、瞠目をする。

闇に慣れた目が、そこに、見慣れた人影を映した。

目の前に、翡翠がいたのだ。

彼女の表情が、嬉しさに染まつた。

「翡翠！ 来てくれたのね、よかつたあ…早く、うちに帰り

ゆすらの言葉が、そこで途切れた。

抱き締めるゆすらを押し返すと、翡翠は背中を向けたのだ。

「ひ、すい？」

「触るな人間！」

冷たく、殺氣のこもつた彼の双眸^{そうぼう}に、ゆすらは凍りついた。

「冗談よね？ 翡翠… お願い、こっちを向いて」

しがみついた彼女の頬に、一条の傷が生まれ、鮮血が飛び散った。

「そんな… 翡翠！」

叫ぶゆすらを、ちらりともせずに、翡翠は抱きついてきた、別の女の背中に腕を回す。

「いいのかい？ 翡翠、あんたを呼んでいるようだナゾ」

女が、三日月形に目を歪ませて、ニイ、と笑った。

「別に。あれは人間の女。俺を置いて、遠からず去ってしまうものだ…。俺はそんなものより、同族のお前の方がいい」

「そうかい、やつと、わかつてくれたんだねえ」

憮然と言つた翡翠に、女は華やいだ声で応える。

今までなら、自分が、翡翠の腕の中にいたはずなのに…。

その女の、勝ち誇つたような笑みは、ゆすらの自信を叩き割るのに充分な威力を持つていた。

「どうして？」

ぽつり、と言つたゆすらに、女・朱明^{しゆめい}は、ケタケタといやらしく嗤^{わら}う。

「どうして、だつて？ アンタ、自分をよく見てみな。血まみれじゃないか。ああ… おぞましい。その手で、いくつ命を狩つたんだい？ 翡翠はねえ、そんなお前の正体に嫌気がさしたんだよ。そんなことも判らないのかい、このケダモノが！」

ゆすらは、戦慄^{せんりつ}した。

清潔だったはずの服は、黒く血に染まり、両手は勿論、頭から足のつま先まで、血で濡れていたのだから。

「ああ… そんな、翡翠」

涙の溜まつたゆすらの瞳は、翡翠だけを見ていた。

どうして。

ドウシテ、ミンナ、アタシヲヒトリースルノ？

新たに、涙の盛りあがつたゆすらの視界の端で、一際、濃い闇が膨らんだ。

「さあ…お前たち、目の前にいるのは、お前たちをそんな目に遭わせた女だよ。存分に、いたぶっておやり」

ゆすらは、妖艶に嗤つた朱明から、必死に後じさる。

「翡翠、翡翠！行かないでつ、あたしを独りにしないで！？」

声を限りに叫ぶ彼女に、闇が、覆い被さつてきた。

肉が食いちぎられて。

あかい、赤い血がしぶく。

鋭い牙に、爪に腹を裂かれ。

内臓が引きずられて、咀嚼そしゃくされる。

悲鳴を、あげる間もなかつた。

「…………つ！？」

ゆすらは、永劫えいごうの闇の中で、声にならない断末魔を上げ続けた。

「んばんわ、維月です。『**br>』のんびり行けりゅ~』の11部のお届けにまいりました。『**br>』翡翠とゆすら、ただ今引き離されでます。」（汗）**br>ええと、朱明、彼女はどうしまじょうか。『**br>』妖艶な彼女は、かなりしたたかな女ですよ。『**br>』わが子達の中でも、かなり濃いキャラですね。『**br>』翡翠と、ゆすらのラブコメティー、これからももしよければこの先もおつきあいくださいよ、お願い申し上げます。それでは、『**br>』ゆるりと、『**br>』賞味くださいな****************

翡翠と引き裂かれ、朱明に攫われたはずのゆすらは…。くぶるゝ翡翠の弟、青蘿に保護されていた。くぶるゝ健気なゆすらに触れるうちに、青蘿は、彼女に想いを寄せ始めた。くぶるゝゆすらは無事に、翡翠と再会することができるのか！？くぶるゝ靈感少女・神崎ゆすらと大食らいで、口の悪い。だけどなぜか憎めない、ウサギ妖怪・翡翠との珍道中。

「いやああ　　ー？」

びくりと背中がのけぞり、ゆすりは田を見開いた。

汗だくだった。

体中から、冷や汗が噴きだしている。

五体を引き裂かれる恐怖が、ゆすりの中に鮮明に蘇った。

「夢…よかつた、夢で。あたしは、妖術にかかつっていたのか」

一言、一言、自らに言い聞かせるように、ゆすりは重く呟いた。

「それにも、なんていやな夢…」

額を押さえて呟いた瞬間、聞きなれた声を聞いて、ゆすりは声の主を凝視した。

「気がついたみたいだね、よかつた」

にこりと笑った青年は、翡翠と瓜一つだったのだ。

「こじは？翡翠とそつくりな、あなたは一体」

起きあがらうとしたゆすりは、眩暈を感じて、再びベッドに身を沈ませた。

「ずっと、彼を呼んでいたね…翡翠を知っているの？」

「ええ…よく、知っているわ。こじは、じこ？」

翡翠と瓜一つのせいもあり、ゆすりは警戒を解いていた。

「こじは華山の麓・広寒宮。俺は青蘿、翡翠の弟だよ。あなたは？」

華山とは、五神山の一つで、神・神仙の土地だ。

その主・西王母の膝元。

黄兎は、西王母の臣なので、その領域を住まいとしているのだ。

「あたしはゆすり、神崎、ゆすり」

「ゆすり、きれいな響きだね。あまり無体をしない方がいい…すつと眠つてたんだ」

「どのくらこ？」

「十日ぐらこかな…朱明が、血だらけの君を銜えてきたんで、慌て

て取りあげたのさ

朱明、と聞いたゆすらは震えた。

「彼女には、俺たちも困つてゐるんだ…でも安心して?…あいつは、こ
こに入つてこられないから」

「どうして?」

人懐つこく笑つた青蘿に、ゆすらの中に凝つていた塊が、静かに、
ゆつくりと溶け始めた。

「結界だよ、あいつだけに聞く術が施してあるんだ」

「…ありがと、助けてくれて」

ゆすらの頬を、つう…と涙が伝つた。

「なつ、泣かないでつ…どこか、苦しいの!…?」

急に泣き出したゆすらに、青蘿は狼狽する。

ちがう。

辛いんじやないんだ。

安心、したんだ…彼の優しさに。

暖かい。

ゆるゆると頭を振ると、ゆすらは軽くむせた。

「大丈夫?まだ無体はいけない。さ、横になつて…水を持つてこよ
うね。すぐ戻つてくるから」

にこ、と微笑んでから踵を反した彼に、翡翠の面影が重なる。

彼が行つてしまつてから、ゆすらの頬を、また涙が伝つた。

翡翠…。

翡翠は、一体自分を見て、どう思つただろうか。

幻滅されいたら、どうしよう。

もし、そうなつてしまつたなら、自分は、そう簡単には立ち直れないだろう。

何があつても、傍にいると言つてくれた彼を信じたい。

もう、一人にはなりたくなかった。

(術中に嵌るなんて、なんと無様な…しかし、どうしてこうなつた

か、だ)

ゆすらは深い溜息をつくと、ゆくつと瞼を閉じたのだった。

ゆすらは、少しずつ元の氣力を取り戻していた。

まだ、一人にされると怯えたが、今はそれも薄まりつつある。ゆすらが、青蘿の広寒宮にきて、あつという間に三円が過ぎていた。

広寒宮、とは月の異称。

見わたす城内の壁や調度品、全てが白磁や、漆喰でできていた。さすが月というだけあって、全てが白や銀で統一されている。

「うう……ん」

ゆすらは、すぐ傍に気配を感じて、目を覚ました。

目を開いた瞬間、青い瞳に思いきりぶつかり、慌てて飛び起きてしまった。

「きや！」

傍にいたのは、青い目の、銀の兎だった。

しかも、標準よりもかなり巨大な。

「様子を見にきたんだけど……脅かしかやつた、かな？」

銀兎が青蘿の声で話し始めたので、ゆすらは、ぱくつくつと、一つ瞳目をした。

「青蘿、なの？」

「うん、起き抜けにあつち（人間）の姿でいたら驚くと思って、この姿で来てみたんだけど、逆だったみたいだね」

ペロリと舌を出しておどける彼に、ゆすらはくすくすと笑った。

「優しいのね、ありがと」

そつと頭を撫でたゆすらの手に、青蘿は嬉しそうに手を細めた。

「照れるな……あ、具合はどう？痛いところはない？」

「大丈夫よ、おかげさまで。青蘿のくれた仙水は、よく効くわね」

青蘿は嬉しそうに、一度ぴょんと跳ねると、人の姿になる。

「ねえゆすら、庭に出てみない？」

華奢な、ガラスの小瓶に入った仙水を飲んでいたゆすらに、青蘿は

そつと誘いかけた。

「庭、があるの？」

「行つてみるかい？」

彼は、あくまでも強制はしないつもりのようだつた。

「ええ…見てみたいわ、連れて行つてくれる？」

そう答えたゆすらに、ぱあ…と明るくした青蘿。

兄同様、まだ幼さを残す横顔に、ゆすらは見とれた。

「ひつちだよ、ついておいで」

白い廊下を抜けて、同じような作りの建物の中を、やつと通り抜け
ると急に、視界が開けた。

「い」が、俺の庭。いくらきれいに整えても…一人で見るのは、どうにも味気なくてね

本当に嬉しそうに笑う青蘿に、ゆすらは口元をほほりぱませる。

よく刈りこまれ、手入れされた庭。

泉が沸いて、魚が遊び。

さまざまな花が、咲き乱れては芳香を放ち。

果樹は、たわわに成つた果実に、枝をしならせていく。

「きれい…まるで、樂園ね」

ゆすらは、うつとつと田を細めた。

青蘿は、そんな彼女に、淡い想いを寄せ始めていた。

兄の恋人とは、分かつている。

これは、してはいけない事だ。

そんなこと、とつくに分かつていてるのに…。

俺、彼女が好きだよ。

傷つけたくない。

だけど、きっと俺は…彼女を傷つけるだらつ。
どうしたらいい？

どうすれば、彼女は泣かなくなるんだろう？

「ずっと、ここにいない？」

風が、ひとりきり木々を揺らしていく。

青蘿と、ゆすらの髪が、しなやかに風に遊んだ。

「嬉しいけど、それは無理なのよ…あたし、人間だもの
ふと、悲しそうに表情を崩したゆすらに、ちくりと、青蘿の心が揺
れた。

時が あたし 違いすぎるのだ。

人間にはあつて、翡翠かわにはないもの。

それは、時間の限界。

変えられない、事実。

やはり、身の程知らずだったんだろうか？

でも、それでも、あたしは翡翠を愛している。

一緒にいられるときが違つても、いられるだけ、傍にいたい。
お願ひ、神さま…。

彼を、愛せる勇気をください。

「泣かないで、ゆすらは…兄さんのことで苦しんでるのに、ゆすら
を苦しませる兄さんなのに…それでも、ゆすらはあいつが好きなの
か？」

顔をあげると、青蘿に、きつく抱きすくめられていた。

「アイツね、あたしが怖くないって、言つてくれたの。始末人のあ
たしなのにね…。態度がでかくて、口も悪くて大食らい…でもね、
そんなアイツが、あたしはどうしようもなく好きなのよ」

「始末人、つて？」

「害をなしたモノを、人知れず始末するのよ。たくさん、たくさん
殺してしまつた」

この身に浴びた血は…消えずに、心の奥底にじびりついて離れない。
ゆすらは、無意識に拳を握りしめる。

「ゆすらは、その仕事がいやなんだね？」

「だけど、もう…どうにもならないわ。あたしは、汚れすぎてる」

「ねえ、どうしても兄さんじゃなきや、だめ？」

きつく、唇をかみしめて俯いたゆすらを、青蘿は切なげに見つめた。

「え？」

潤んだ青い瞳に見つめられ、ゆすらは赤くなってしまった。

浅はかなのは、俺も同じだ。

一時だけでも、彼女の傍にいたいと思つてしまつた。

兄さんは、絶対ここに、ゆすらを迎えて来るだらつ。

その時が来るまで、せめて愛させて欲しい。

「たとえ一時だけでも、俺はゆすらが好きだ。行かないでくれよ」

「青蘿…」

吹きぬけた柔らかな風に、青蘿の銀髪が、流れて揺れた。

ゆすらは、花の合間にひっきりなしに走り回る、子兎たちを見つけて微笑んだ。

「見て…あの子たち、隠れん坊でもしているのかしら？」

「…みたいだな。あいつらも、俺の弟なんだよ？」

「ずいぶん、年が離れてるんじゃない？」

きょとん、と首を傾げたゆすら、青蘿はそつと口づけてから笑つた。

「まあね、俺たちは兄弟が多いからな…あいつらは一番下の奴らだよ」

「かわいいわね…あの茶色の子、翡翠にそつくじ！」

ゆすらが指をさしたのは、つやつやとした茶色の毛並みを、一生懸命に毛繕いしている子兎だつた。

「あいつは緋ひづ団だんつていうんだよ…それより、こんな時ぐら…兄さんの話なんかしないでおくれ」

抱き締める青蘿の腕の中で、ゆすらは遠くを見つめる様な、複雑な目をしていた。

「青蘿、苦しいわ？」

「「「メン、出来心だ」」。あいつら呼んでくるから、待つてて」

青蘿の背中を見送ると、ゆすらは一筋、溜息をついた。

「気持ちは嬉しいけど、あたし…あなたに応えてあげられない。あなたを、傷つけちゃう」

ゆすらは、頭を抱えて屈みこんでしまつ。

そんな時、しゃがんだゆすらの足元の茂みが、かさかさと動いた。頭をのぞかせたのは、先にゆすらが、かわいいと言つて、指をした子兎だつた。

「おねえちゃん、おねえちゃん?」

「え?」

ゆすらが顔をあげると、茶色の子兎が、小さな前足を一生懸命に伸ばして、ゆすらを見つめていた。

「悲しいの? どこか痛いの?」

ゆすらが、涙を拭つてから首を振ると、子兎は、手に頬ずりをしてから人の姿になつた。

「泣かないで、おねえちゃん...」

緋呂は、おろおろとゆすらの周りを右往左往する。

「ありや…見当たらないと思つたら、先に来てたのか」

その声にゆすらが振りむくと、腕いつぱいに子兎たちを抱いた、青蘿が立つていた。

「兄さん、お願ひ、おねえちゃんの傍にいてあげて? 僕じゃダメなの、だから…」

緋呂はぐいぐいと、青蘿の手を引いて、ゆすらの手と握りあわせる。

「おねえちゃん、僕もね…時々、おねえちゃんみたいになるの。そしたらね、必ず『負けるな』って、誰かが傍にいてくれるんだ。だから、おねえちゃんも、絶対ひとりぼっちじゃないよ。もう泣かないで?」

「ありがと、いい子ね…」

「えへへ…おねえちゃん、お母さんみたいだあ

についつと笑つたゆすらと、一緒に緋呂も笑つた。

儂げに笑う彼女に、意を決したよつて、青蘿はゆすらを抱き上げた。いわゆる、『お姫様だつ』である。

「せつ、青蘿! ?おろして…くれる?」

居心地の悪さに加えて、恥ずかしさが急激に増していく。

「ダメだよ、離してあげない」

真つ赤になりながら、じたばたともがくゆすらに、青蘿は食のよつ
なキスをした。

「兄さん、このお姉ちゃん、だあれ？兄さんのお嫁さん？」
興味津々に尋ねてくる弟たちに、ゆすらは慌てる。

「あ、あたしは違うのよ……翡翠のつ」

そこまで言いかけたゆすらの言葉は、おどけた青蘿の声に、すっかりかき消されてしまった。

「兄さんも、まだ来そうにないし……俺が貰つちやおつかなあ？」

「ちょっと、ちょっと青蘿？」

ゆすらは、慌てて弁解を試みるが。

「兄さん、翡翠兄から略奪するの？」

「略奪愛だねつ、うわあ泥沼……」

とかなんとか……。

子供のクセに、なぜか非常に世辞慣れている彼の弟たち、ゆすらは強く額を押された。

口を、はさむ余地がないつ！

「きや……」

急に、銀兎に戻った青蘿に押し倒される形で、白銀色の月光花の群れに、倒れ込んでしまった。

銀の光を散らして、花びらが散る。

「ゆすら……」

ペロリと頬を舐められ、ゆすらは青蘿を見た。
自然と頬が赤く染まる。

それに負けじと、子兎たちもが彼女に群がつた。

「兄さんだけずる」、僕たちも、お姉ちゃんにだっこして欲しいの

（

「ゆすら、俺…保証できないよ、やつぱり。君が好き」

「ダメ。分かってるでしょ？あたしは、あの人しか、愛せない。だから……」

辛そうに絞りだしたゆすらは、ふい…と顔を逸らした。

「いやだ！俺は、本気だよ？迎えが来てしまつまで、それまででもいい。せめて、それまで君を愛させてくれ」

彼の、剣幕に驚いた子兎たちが、ゆすらにきつく身を寄せた。

「あたしも…あなたが、うつん、じこにいてくれる、あなた達みんなが好きよ。だけどね、違うのよ…『好き』と『愛してる』は」

loveは、likeとは違つ。

似ているけど、まったく別の感情。

「そつか…そうだよね。俺、悔しいけど君を諦めるよ…なーんて、言つと思つたら大間違い」

くるりと歪んで、青蘿は人の姿に戻る。

「え？」

満面の笑顔で破願した彼に、全体のテンポが一拍、いや二拍以上がずれた。

「俺は気が長いからね、氣長に待つさ…。つたく、兄さんもずるいなあ、こーんな美人の彼女がいて」

「やめてよ、おだてたってムダなんだから」

言つがしかし、げらげら笑いなので、まったくもつて、説得力がないのだった…。

おやじ… めい！ つの姫（前書き）

傷ついた翡翠と弓を裂かれてしまったゆすらは、翡翠の弟・青蘿の館である広寒宮で保護されていた。

叶わぬと知つても尚、ゆすらに淡い想いを寄せた青蘿。
ゆすらを『お姉ちゃん』と書いて慕つ、翡翠と青蘿の弟・緋田と子兎集団も加わつてなにやら賑やかに…。

ゆすらと翡翠は、無事に黄兎一族の陰謀を破り、再会することができたのか！？

靈感少女・神崎ゆすらと、ワガママで、口が悪くて態度のでかい、けどなぜか憎めないヤツなウサギ妖怪・翡翠との珍道中。

ゆすらり… もう一つの姿

一方その頃、ゆすらり救助隊（？）の一人はといづと…。

「一牙つ！ てめえ、また間違つたな… なんでこんな場所に出たんだか」

「はえ～… 一本下の道に出ちまつたのかあ、やばいなー」

深々と溜息をつく一牙に、翡翠は噛みついた。

ちなみに、徹底的に一人の会話は、会話として機能していない。
しかも二人は…。

なぜか、蒿里とは真逆に位置する、こんろん鹿鳴山の山麓に突つ立つてているのである。

簡単に言えば、迷つたのだ。

「はあ… ゆすらあ、おかしな事になつちまつたぜ」

「けつ、これだからジジイはよ… さつさと方向転換するぞ！」
ぽつりと呟いた一牙に、翡翠は『お前が迷つたからだ』と毒づいて、
またも噛みつく。

一人、走り出した翡翠の背中に、一牙はやれやれと、首を竦めたの
だつた。

なんだこの、ひどい胸騒ぎは…。

嫌な予感がする！

これは、ホントに急いだ方がいいみたいだ。

翡翠は、疾駆しながら体の形を歪ませる。

まるで、餌でも溶けるかのように、人間の姿が拉げて、あつという
間に黄兎の姿に戻つていた。

「おう、随分と焦れてんじやねえか？」

走る翡翠のすぐ横に、赤毛の豹猫が並んできて、一牙の声で茶々を
入れる。

「つたりめえだ！ あのババクソ（朱明の事）めえ、今すぐこでもぶ
ちのめしてえつ」

ギリギリと歯噛みする翡翠に、一牙は、皿を口円形に歪めて一やりとした。

「ゆすらだつて、ただ… やられるだけじゃねえと思つぜ？ の方は、そこの雑魚なんか、比べモノにならねえくらいに強いんだ」

「ああ… 確かに、もの凄え靈圧だもんな。しかも『始末人』だし、なにか面白くなくて、鼻の頭に皺を寄せた翡翠に、一牙はふつと吹き出して見せた。

「お前、ゆすらのオトコのくせに、随分と鈍いんじゃねえ？」

「んなつ、なんだとうつ…」

「あんなに、靈圧の強い人間がどーにいる？ あれは靈力なんかじゃなくて『妖力』だよ」

「ゆすら、人間じやねえのか！？」

翡翠は目を剥いて、動かしていた足を急停止させた。

「ふうむ、人間だが… そうでもないとも言える。半妖ハーフなのさ。だが… どちらかといえば、ゆすらは妖怪側の人だな」

「妖怪つて、属は！？ 種属はなんだつ」

一牙は、つぶれたえる翡翠を見て、面白がつゝ一ヤリとした。

こんなに、動搖する翡翠を見たのは初めてだ。

余程驚いたんだろう、両耳が、ぶるぶると震えている。

「聞いても、ビビつて死ぬなよ？ ゆすらの本性は饕餮だ。ゆすらの父上が饕餮だつた」

「とつ、饕餮…！？ ！？ 怖くなんかねえぞ？ てか、普通に惚れ直したつ」

言葉とは裏腹に、饕餮と聞いて、一瞬にして凍りついた翡翠。

「ほーう… その割にや、逆立つてんぞ？ 毛皮」

「つづ、つるせえやー… さつさとゆすら奪還だつ」

背中の毛皮を逆立てて、翡翠はガリガリと、憤然として地面を引っ搔いた。

「へいへい、見栄つ張り君」

「るせえ… まだ言つてきてめーつ」

「バカ兔ー…見栄つ張りのバカ兔ー」

ぴょんぴょんと、跳ね回つて翡翠をからかう一牙。

「歌うなつ、待ちやがれつてんだ、コラー！」

「やーだねー」

一牙のからかいに簡単に乗せられる、単純おバカな翡翠なのであつた。

『饕餮』とは冷酷無慈悲で、妖怪のランクとも言える妖力が桁外れに強い、最強の殺戮者の称号だ。

黒く、滑らかな体躯。

左右、赤と青の色違ひの瞳・オッドアイを持つ。再び走り出した二人の背を、砂混じりの大風が押した。まるで、意志でもあるかのように…。

一路、目指すは蒿里！

「つくしゅん！やだ、カゼかしら」

と、ベタな反応をしたのはゆすら。

天然の水晶石に座る彼女には、びつしりと子兎たちがこびりついている。

「随分と気に入られたようだね、しかも寝てるのもこじるし…」

傍に来た青蘿は、ゆすらの膝の上で眠る、子兎たちを見て微笑んだ。ゆすらの膝の上で眠る子兎たち。たまに小さな、すべすべとした耳が動いている。

「そろそろ中に入ろうか？冷えてきたからね」

「そうね、でも…この子たち、起こしてしまつのが可哀相」
ぎゅうと、背中から抱き締めてくる青蘿の手を撫でて、ゆすらは困つた顔で笑つた。

瞬間、大風が彼らを激しく殴る。

「ひやあ、寒いよう」

人型になつた緋呂が、ゆすらに強くしがみついたのを皮切りに、テ

ラスにいた三人と数匹は、冷えきつた夜風に追われて、宮内に逃げ込む形となつた。

強風の吹き荒れる、テラスから避難してきたゆすら達は、一段落して暖炉前でまどろんでいた。

しかし、まどろみも束の間、暖炉の前でうとうとしていたゆすらは、子兎集団と、緋呂の集中攻撃に、またも撃沈してしまつていた。

「お…重いわよ、ちよつとお

「だつこして~」

「だつこ~」

「お母さんみたい~」

「お姉ちゃん、温かい~」

「も~う、じうなればヤケクソーツ」

甘えてくる、子兎たちを抱き締めて頬ずりすると、嬉しそうにほしゃぐ声が耳を撻る。

ゆすらは、緋呂（人型の）をだつこしたまま、榻に座る青蘿を振りむいた。

「あなた達のお母上は、どんな方？」

尋ねたゆすらに、青蘿は、紺碧の瞳を一瞬だけ、どこか悲しげに翳かげらせた。

「優しい人だよ…いつも、周りを包んで和ませてた」

「そう、会つてみたいなあ、翡翠と、貴男のお母上だもの、さぞ綺麗なヒトでしょうね」

「残念だけど…それはムリだよ、もう消滅してしまつた」

「消滅つ…て」

消滅、それがなにを意味するのか。ゆすらだつて分かつている。

父の最期を、見取つたことがあるからこそ。

妖は、滅多なことでは死はない。

それは、個体の寿命であつたり、他の妖から受けた深手だつたりさ

まざま。

目を剥いたゆすらに、青蘿は苦笑して見せてから語り始めた。

「うん、殺されたんだ…武器の材料として、人間に。だから父上は、君と翡翠を許せなかつたんだね。俺たちは、滅多なことがない限り、人間には手出ししない。だけど、父上だけは考えが違うらしい」

「なら、どうしてあたしを助けたの？あたしだつて、人間よ？」

ゆすらは、言葉の裏に潜む、深い憎悪を悟つて、きつく唇をかみしめた。

「ゆすらは、全部が人間じゃないだろ？かなり、強い妖気を感じるから」

「そつか、やつぱり人間には見えないか…容姿だけじゃ

ゆすらは、一つ溜息をして、切なげに微笑んだ。

「ハーフだね、けどかなり妖に近い…。なんの種属か、聞いてもいい？」

心なしか、青蘿の顔が強ばつていて、ゆすらは内心で自らを嗤つた。

翡翠が、自分の本性を知つたときは、こんな顔をするのが、と。

「怖い？青蘿」

「うん、怖い…けど、知りたいんだ。教えてくれるかい？」

ひた、と紺碧の瞳に見つめられて、ゆすらは「クリと小さく頷いた。

「いいわ、本性を明かす。けど、キレイになつちゃ嫌よ？」

「ああ、約束する」

緋田と子兎たちは、緊張感がないといつも…退屈して、いつの間にか眠つていた。

「ホントね？あたしは

「瞬間、ゆすらを、青い霧状のものが包んだ。

濃い霧のせいで、視界は全く見えない。

やつと霧が晴れて、現れたゆすらを見た青蘿は、おのの戦き、座り込んでしまつた。

まず青蘿が見たのは、赤と青…左右対称の瞳。

そして、深闇を固めたようで、滑らかで華奢な、狼の形をした妖怪だった。

「と… 號餐餐、まさか」

「これが、あたしの本当の姿。殆どは人間の方なので過ごしてゐるけどね」

饕餮になつたゆすらは、フサフサと尻尾を振る。

撫でても
しそう?

おそるおそる伸びられた青蘿の手に、ゆすりむ歎む振りをして、彼を散々にからかつた。

「もう、人の悪い……程々にしてくれよお」

「だーって、面白いんだもん… そんなようなゲームが、昔あったの

1

「うわあ、マジで？ろくでもないケーハがあるもんだ」
ぞぞくつと、背中が寒くなつた青蘿は、しきりに腕をさする。

「ひらつ、醍醐と回じこと言つてゐる。やつぱり兄弟ね」

優しい温みに、ゆすらは、気持ちよさそうに目を細めた。

「ちえ… また兄さんだ、なんか妬ける」

背中に、小さな温みと重さを感じて、ゆすりは背中を振りむく。振りむいた背中には、びつしりと子兎たちがくつついていた。饕餮の姿が、全く怖くないらしく、そもそもと無邪気に、背中によじ登ろうとしているのもいる。

「あれま… チビたち復活… モテるねえ」
「じじ」と田を擦りながら、緋田が寄ってきて、甘えて呟つた言葉
に、ゆすらは田を見張つた。

「お...母さん」

「え…」

「寝ぼけたるだけだよ……雑用は、母さんの顔を知らないんだ。わざと、あつらに母さんを重ねてるんだうね」

「独りじやない孤独と…独りの孤独、どっちが辛いのかしらね？」

切なそうに微笑む青蘿に、ゆすらはぽつりと呟いた。

自分に抱きついたまま、再び眠りに落ちた、緋団と子兔たちに複雑な顔で微笑んでから、ゆすらは『今のはナシね』と首を竦めた。

「ゆすら..」

ゆすらが、なり代わった黒い獸は、伏せていた状態から、起きあがるよつにして人間の姿に戻った。

湯浴みを終えて、部屋に戻つたゆすらは、ベッドに座りつゝして、一瞬その動きを止めた。

ベッドの衾かけふとんが膨らんでいるのだ。

しかも、三つ連なるようり^と。

時偶ときたま、もぞもぞと動く小さな侵入者に、ゆすらはくすくすと笑つてしまつた。

「ここにいるのね、出でおいで？」

つんつんと、膨れた衾をつづくと、『わやあ』『わやあ』『わやあ』と声がする。

「だから言つたじやないか、すぐ見つかっちゃうつて…別の場所にしようつて、言つたのに！」

そもそもと、始めに顔を出したのは、茶色い毛皮の緋団。それに続いて、白と銀色の兄弟兎も、顔を覗かせた。

「あらまあ

「じめんね、お姉ちゃん…僕たち、お姉ちゃんが心配だつたんだ

「心配？」

きょとんと、首を傾げるゆすらは、緋団はつぶらな瞳を、つるつると潤ませた。

その瞳は『叱らないで？お願い』と言つてゐる。

彼らの心遣いが嬉しくて、ゆすらは子兔たちを抱きあげた。

「ありがとね、嬉しい。ふくふくしてて温かい」

ゆすらは、子兔たちを抱いたままで、ころんとベッドに転がつた。

「お姉ちゃんも、いい匂い～♪」

「お母さんみたい、ふわふわしてる」

腕の中で、居すまいを整えた子兎たちは、小さな体を精一杯、ゆすらにすり寄せて甘える。

次第にまどろんできたゆすらは、小さく欠伸をすると、ゆつくりと眠りの深淵に沈んでいった。

少し、休憩…。

そしてまた、次の日には元気に。どんなどとも、急ぎすぎは禁物。

翡翠の迎えが来るまで、のんびり、行こうよ？

おやじ...おやじ いつの姿（後書き）

いつも、维月です。更新が遅くて済みません。
作中の、緋囮とおやじのコンビが密かなマイブームだったり（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1023a/>

のんびり行こうよ？

2010年10月9日01時04分発行